

第5回文化遺産学フォーラム 「水がむすぶ文化遺産～最上川と淀川～」

【基調講演】

淀川と水都の変遷

河内 厚郎（文化プロデューサー／夙川学院短期大学教授）



河内 厚郎氏

私は、大阪と神戸の間、阪神間に生まれ育ったもので、川には非常になじみが深いんです。夙川や芦屋川、住吉川、先日洪水が起きました都賀川とか、阪急電車に乗っておりましたが、たくさんの川を渡って通勤・通学してきました。

そういう阪神間の市民にとっては、十三を越えて淀川を越えるときというのは感動であります。子供のときから、淀川は他の川と比べて水量が全然違いますので、これはもう海のような川を渡るんだなと思って、いつも見とれていました。あるとき、現在の淀川が明治の終わりごろにできた川だと知って驚きました。つまり、20世紀の初めにできた人工の川なんですね、新淀川というのは。今の若い人はもしかしたらご存じない方が多いかもしれません。もともとの淀川というのは、大阪市内を流れている大川の旧淀川のことでありまして、こんなことでもはっきり言わないともうわからないという気がするんで

すね。

そのときに初めて私は歴史というものを痛感したというか、何となくそれまで、山も海も川も自然のものだと思っていたんですけれども、川というものは大阪にとりましては非常に人工的な歴史があって、まず、流域そのものが大幅に変わってきているということ、子供心に痛感したんですね。

2つの地図が入った資料を刷っていただきました。



現在の淀川流域

左側の図は現在の京阪神の淀川流域で、右側の図は古代の7世紀から8世紀にかけての淀川流域をまとめた地図です。これを見ますと、随分現在の淀川の姿と違うわけです。まず、現在の大阪市は難波宮、難波となっております。大阪湾の出口のところですね。その右に草香江とあり、生駒山と大阪市との間は湖ようになっております。これは河内湖というふうにも言いますが、そこへいろんな川が流入してくるものですから、もともとは内海であり、それから湖みたいになり、池になり、沼地になっています。現在、東大阪のあたりは完全に陸地になっておりますけれども、古代の初めのころはむしろ内海のような湖であったということになるわけです。ここへ京都盆地のほうから流れてきております淀川の本流、それから今現在は堺へ流れております大和川も、江戸時代の初期までは現在の大阪市へ北側から流れ込む、北側とは、つまり大阪城の周りに流れ込むということで、淀川と大和川という2つの大きな流域の水が全部大阪市の中心部へ流れ込んできたわけです。

ですから、今の大阪市内を流れております大川の水量というのはかなり多かったわけで、大和川の分まで入り込んでおりますので、天満のあたりの水量は、今でもかなり多いと思いますけれども、古代・中世には川幅ももうちょっと広がったんだろうと推定されるわけです。

右側の地図は、古代に都が移り変わるといふ宮都



古代宮都の変遷

の変遷の地図であります。

ご承知のとおり、794年には平安京ができて、これが長く続くわけですが、その平安京の造営に至るまで、もうしょっちゅう都が入れかわっております。平城京でも70年ぐらいですから。

平城京が、あれだけ大規模な都をつくって、なぜ70年ぐらいしか続かなかったのか。その理由は、やっぱり水だと思います。水を求めるのがやや難しい。それから、水はけが悪いということですね。ですから、大和盆地の中に都ができますと、死体なんかでも川の中に打ち捨てておくような感じで、流れていかない。疫病が流行ると大変なことになりますので、それがやっぱり一つの原因じゃないだろうか。京都盆地のほうの水はけもよかったというふうに考えられると思います。

そのほかにも、藤原京でありますとか、聖武天皇が次々都を移しますので、恭仁京、紫香楽宮などがございます。それから、この大阪のところにありましたのは、難波宮、いわゆる難波京でありますけれども、ここは過去に何度か都になっております。

一応、記紀として編さんされているもので、大阪に都が置かれました一番古い記録は、応神天皇のときだとされています。これは難波大隅宮といわれています。この「大隅」というのがどこかというのはいろんな議論がありますが、現在地名が残っております東淀川区大隅というところに、大隅神社というのがあります。そこだとしたら、これはかなり淀川の流域にべたっとくっついた都であった。しかし、それほど本格的な都城をつくったのではないと思います。天皇が政務をとられるところだという程度の意味だと思います。

難波大隅宮は、おそらく放牧場が近かったのではないのでしょうか。牛や馬なんかを飼われていた地域ではないか。淀川流域というのは、例えば高槻のあたりに上牧という地名がありますが、昭和50年代ぐらいまで馬の放牧のようなことが行われていたと、私も覚えています。要するに、淀川の川岸、その辺が牧草地帯でありまして、天皇家の馬などが飼われていたところだと言われております。

それから、その次に、応神天皇の次の仁徳天皇、これはほぼ史実に近いかと思いますが、難波高津宮。これは戦前、ミナミの東にあります高津神社、「高津」と書きますのでそう思われていましたけれ

ども、最近の学者の説では、やっぱり大阪城のあたり、NHKのあたりだったんじゃないだろうかということになっています。NHKの放送局の隣に高床式の倉庫みたいなのが出土して復元されておりますけれども、あのあたりが高津宮だったのではないのでしょうか。

それから、7世紀の中ごろに難波長柄豊碓宮という、これは、現在、長柄とか豊崎というのは町名にも残っておりますけれども、孝徳天皇の都が大化改新の後に造営されて、これが古代の大阪では一番本格的な宮殿をつくった都だと思います。

こういうものを考えますと、淀川というものが古代の都市の建設に重要な役割を果たしていることがわかります。当時、大規模な都市というのは近畿に集中しておりますから、日本の都市建設、古代都市の建設というのは、淀川抜きにはあり得ません。例えば、淀川というのは、琵琶湖から流れてくる瀬田川、これが本流みたいなものですね。瀬田というのは「勢田」という字を書くときもあるわけで、琵琶湖から一気に流れ出しますから勢いが強いということですね。それから木津川、京都の桂川、大体この3つの水域を重ねて淀川になるわけですが、木津川の本津というのは、字のとおり「木」、つまり木材を陸揚げするところと一般的には考えられていますね。古代にいろいろな宮殿とか寺院をつくるときに、特に聖武天皇のときなんかそうなんですけれども、木津あたりで切り出してきた材木を運び出すとか、あるいは逆に陸揚げするとか、そういうところからついた名前であろうと考えられます。

そういう意味では、近畿地方にとってだけではなくて、日本の古代の「母なる川」というふうな言い方をしてもいいと思うんですけれども、ただ、淀川ほど人間臭い栄枯盛衰というのを映し出してきた川はないと思うんです。歴史の中心にあっただけではなくて、さまざまな支流と分流がありまして、その流れも変わるし、速さも変わります。それから流れが非常に複雑なんです。まず、瀬田川は、琵琶湖から流れ出て南へ下った途端に、ものすごく岩が切り立っている場所があります。そこは「シカ跳び」とか「シシ跳び」という、シカだけが跳んでいけるというような場所があります。岩場がありますので、そこで障壁があり、水が一気に流れていきません。そこで、琵琶湖と瀬田川の沿岸にいろいろな水

が洪水で浸み出してしまったりするので、瀬田川の^{しのんせつ}浚渫というのは近江の国の人にとっては重大な問題なんです。たびたび願い出るわけですが、一気にそれをやっけてしまうと、下流のほうにまた変わってきます。大阪のほうでは洪水が起こるかもしれない。一気に水が流れてきてしまっても困るということで、古代から水をめぐる争いというのが、淀川の上流と下流ではずっと続いてきているわけで、近代になるまで続いています。そういう意味で、これは一つの川によって共存してきたとはなかなか言い難いほど利害が複雑で、そういう意味で人間臭い川だということができると思うんです。

有名な鴨長明の方丈記に、「行く川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは……」というふうな言葉がありますが、まさにそれが淀川の歴史だと思います。

淀川は、チグリス川やユーフラテス川、あるいはナイル川や揚子江というふうな広大な流域面積を持っているというわけではないんですけれども、沿流にいろいろな盆地とか水域を持っておりますし、それから琵琶湖という巨大な水源池を持っておりますので、やはりある意味では大河だといえますね。いわゆる大陸を流れる大河ではありませんけれども、流域全部を考えるとかなりの文化と風土を押さえている川なのだと言えると思います。

もっとも、一般に淀川と呼ばれるようになったのは、江戸時代に入ってからだと言われておりました。『古今集』あたりから淀川という言葉はちらりと出てくるわけですが、『万葉集』では取替川、ほかにも近江川とか山城川、つまりその流れているところの名前で呼ぶというふうないろいろな呼び方をされておるわけです。あるいは大和川を「南の川」と言うのに対して、「北の川」なんて言ったりされております。大体、江戸時代に歴史的な呼び名みたいなのが統一されてくるわけですが、江戸時代というのは、ご承知のとおり、平和が続きましたので、一種の郷土史ブームというのが起こっているわけですね。実際、中世末期は戦乱の時代ですから、平野部の文献というのはかなり焼けておりますよね。なくなっております。ですから、古代や中世に関する歴史の資料が近世、江戸時代になってからたくさん生まれておりますけれども、どこまでが正確かというのは、何とも言えないと思うんです。

江戸時代になってから郷土史ブームが起こって、どうしても自分の感情を交えて編集している面もあると思います。だから、古代のことに關してはよくわからないところも多いわけですが、発掘されたものと文献とを照らし合わせて、少しお話ししてみたいと思っています。

淀川は、水量が非常に豊かなんですね。というのは、流域が広範囲にわたっておりますし、琵琶湖がありますから、水が枯れるということはほとんどないわけです。それから、流域面積の半分近くを琵琶湖を占めておりますので、下流の洪水が軽減されます。また、盆地がいろいろとたくさんあり、その盆地の出口が狭くなっていることでも、洪水を抑えるという構造となっているわけです。

一方、盆地ごとに文化と気候が非常に違います。例えば、北日本的な気候から南日本的な気候までの両方を流れていますので、北部のほうでは冬に雪が降りますし、南部には夏に台風があるということで、洪水が重なりにくい。そういう意味では、淀川はうまくできている川だとは言えると思うんです。

ただ、先ほど申し上げましたように、治水や利水、あるいは洪水時の対応については、上流と下流で利害が非常に対立してきました。明治以降は、琵琶湖沿岸の浸水の被害とか下流の水害を軽減するために、洗堰あらいげきというものを滋賀県につくっているわけです。あるいは瀬田川を浚渫したりして疎通能力を高めたりもしております。洪水時に洗堰をちょっと開けると下流が助かり、洪水が去った後は速やかに琵琶湖の水位を下げるというふうにしたんですけども、水門を全部閉めてしまいますと湖の岸辺が浸水してしまいますので、どうしても滋賀県の方は洗堰を全部閉め切るということに反対するということで、近代になってもまだ対立が続いてきているわけです。

江戸時代にも、瀬田川の浚渫を近江の人は何度も願い出ているんですが、なかなか幕府が許可しない。これは、いろいろな理由をつけているんですけども、何か一朝事あれば幕府軍が上方へ攻め入ることができるように、浅瀬にしておきたかったのではないかという説もあります。単に利水だけの問題ではないんじゃないかと。淀川は、そういうふうないろいろな歴史を背負っている川だということでもあります。

明治になりまして、フランスの近代治水技術を学んだ沖野忠雄という人があらわれまして、この人が瀬田川の浚渫によりやく踏み切ったわけです。それでもなかなか淀川の水量というのは一定せずに、私が思うには、大体、昭和40年ぐらいじゃないでしょうか、淀川流域の洪水がかなり減ったのは。昭和40年ぐらいまでは、例えば北河内から中河内にかけてはもう浸水が絶えなかったですよ。もともと古代には海や沼地でしたから、何かありますと、寝屋川とかあのあたりはよく浸水しておりました。それを思えば、この40年ぐらいで水はけが随分よくなったなというふうに思います。

私の名前が「河の内」と書くわけですが、今の大阪平野は、摂津・河内・和泉と3つの国に分かれておりまして、そこをまた、摂津国が大阪と兵庫に分かれておりますけれども、どれも水に関係ある国名がついているわけです。古代の初期のころは「おおしこうちのくに凡河内国」と、3つをまとめて凡河内と呼んでおります。

それから、「河内」、ベトナムのハノイがこの字を書きます。同じ字を書きますので、だから地形的には似ている、つまり山脈部から一気に平野に流れ下るところで、いろいろ蛇のように蛇行するとか、そういう地域だと考えられます。だから、ベトナムからの留学生というのは、この河の内という地名には非常に親近感を持ってきているわけです。

淀川が一番主流となってきたのは、瀬田川から流れてくる淀川です。これがいわゆる京阪と大阪をつなぐ、後に上方と呼ばれる文化圏をつくっていくわけです。ここまでくるのは歴史のある種の必然というか、人工的にそうなってきたんですけども必然だったんじゃないのかなと思うのは、淀川の付け替えというのは、古代から何度も行われております。例えば、長岡遷都、平安遷都をされた桓武天皇のときですから、8世紀の終わりになります。桓武天皇という方は、それまでの奈良朝とは全然違う王朝をつくろうとされたと思うんですね。7世紀の終わりに壬申の乱というのがありまして、天智天皇系と天武天皇系で戦います。これは天皇家の骨肉相はむ戦いですが、ここで基本的に天武天皇系が勝ちまして、その後、持統天皇が藤原京をつくり、その子孫が平城京をつくるというふうにして100年ほど続くわけです。最終的に、道鏡事件の後にこの流れ

が途絶えてしましまして、天智天皇系であった桓武天皇が即位されます。それで、この天皇としてみれば、仏教が強過ぎる奈良の平城京というのはあんまり好きではなかったでしょうし、それから、古代に平城京の次に大きな町は難波だったと思いますが、この2つは旧勢力の牙城なので、それをつぶしてしまいたいと思ったからかどうかはわかりませんが、桓武天皇が淀川の付け替えをします。

一つは成功します。これは何かといいますと、この地図を見ていただきたいんですが、京都から大阪のほうへ流れてきております川が大阪湾に出る前に、今の大阪市東淀川区、それから尼崎のほうへ流れます三国川となります。これは桓武天皇のときに開削されているわけで、つまり淀川から難波を通らずに瀬戸内海へ出る水路です。つまり、今の兵庫県川西市のほうから猪名川が流れてきておりますので、それと淀川とを横に結んで、現在の地名で言いますと、淀川から江口のあたりで、江口というのは新大阪駅の近くにありますが、そこからちょっと北へ蛇行しますけれども、西へ入って、そのまま尼崎のほうへ出る。これが三国川、神崎川。これによって、難波というのが水運の拠点ではなくなってしまうわけです。

それでも大和川は難波に流れてきておりますから、大和川の水運も切ってしまうと考えると、これを泉州の方へ流そうといたします。これは失敗いたします。というのは、今の大阪市より北側は、もともと大阪湾がさらに湾曲した沼地みたいなところですから、運河を掘ることが楽だったと思うんですね。千里丘陵と上町台地の間を掘るということはそんなに難しくなかったと。しかし、上町台地そのものを掘るといのは、非常に岩盤が固いので、古代の技術では無理なのであきらめたんですが、地名だけは残ってしましまして、近鉄沿線に「河堀口」という、河掘る口といたしまして、これは何か上町台地を切ろうとした跡だそうなんです。これは成功しないんですね。

結局、江戸時代になりまして、元禄期（1688年～1703年）になってやっと付け替えに成功して、現在、柏原の方から堺へ流れておりますけれども、これは随分時間がかかったわけです。

だから、桓武天皇としては、なるべく難波に水運が集まらないように工事されたと推定されます。そ

れはなぜかよくわかりませんが、そういうわけで、三国川というのが生まれまして、ちょうど平安時代から中世の初期にかけては、こっちが非常に栄えて、例えば、平家が福原へ遷都をするというときには、この三国川のほうから都が流れていくというふうなことになるわけです。しかし、海に面して水路が集まってきている難波が港として向いていないはずはないので、結局は難波をつぶすことは完全にはできなくて、大都市としての難波という水都は一度は衰退いたしますけれども、渡辺のあたり、今の天満のあたりが港として復活してきます。例えば、義経が船出するとか、頼朝が上陸するとか、今年（2008年）から、天満橋西側の八軒家浜に水上バスが乗りつけられるようになりまして、昔は伏見からそこまで来ていたというコースが復活した、あのあたり一帯が港として中世からもう一回栄えてくるわけです。ですから、古代から中世にかけて、大阪というのは港町としての地の利があったということになると思います。

これは古代の地図で、この後もどんどん地形が変遷してきているわけですね。中世になりますと、草香江という、東大阪あたりの湖はほとんど消えていき、低湿地帯になります。どんどん水が埋まってくるわけですが、それでも「水の都」というふうに大阪が言われるようになるのは、大阪市内、この上町台地、配布した地図に難波京と書いてあるところが上町台地の北端、今の大阪城のあたりですが、この西側が秀吉の時代以降どんどん開発が進んで、西へ延びていきます。まず船場ができて、どんどん西へ延びていく。その中を水路が縦横にめぐらされているので、江戸時代の大阪はいわゆる堀割の町という「水の都」になっていくわけです。現在、大分埋め立てられてしましまして、その面影は大川とそれからもうちょっと湾岸部に近いあたり、あと東横堀川というのが残っておりますけれども、上に高速道路が通っておりますので、雰囲気はあんまりないんですが……。それでも毎年6月の終わりになりますと「船乗り込み」をやっております。これは7月の大阪松竹座での歌舞伎興行の前に、出演する俳優が全員船に乗りまして、大川から、例年は中之島からですが、東横堀川を回って、道頓堀まで行きまして、そこで上陸して松竹座に入るという行事です。これは江戸時代から行われているもの

を、今年に1度だけやっているんです。昭和になってから途絶えていたんですが、昭和54年（1981年）に復活しましたときには、当時水が臭かったのですから商工会議所が東横堀川に香水をまきました。今は本当に水もきれいになりました。

それから、大川に関しましては天神祭ですね。これは戦前と今とではコースが違います。今は上流へさかのぼっていますけれども、船渡御は行われている。江戸時代の文化を何とか伝えているということになるわけです。

船渡御もそうですけれども、今言いましたように、歌舞伎の俳優が船に乗って川をさかのぼってくる風景、こういうのは民俗学者によると、大変興味深いものだそうです。例えば、淡路島などへ行きますと、海の向こうから神様がやってくるという、客人まればと信仰ですね。海の向こうから幸せを運んでくる神様がいます。内陸部では川をさかのぼってくるというふうなイメージですね。短い時間滞在していたら神様とか客人と呼ばれるんですが、長い時間滞在すると居候といって嫌がられるわけです。当時、芸人というのは非日常的なイメージですから、そういうスターがやってくるというものが町のおもしろさ、風物詩になっていたということがわかるわけですね。

そういうことを指摘しているのは、大阪出身の民俗学者で折口信夫という、これは釈道空という名前で、有名な歌人ですけれども、折口信夫の「折口」というのは、道頓堀川とか木津川のあたりで川においていく口に住んでいたという、そこから折口という名前がついたという説があります。彼自身が芸能に詳しい人でしたので、芸能人に客人を見るところを思いつかれたんだと思います。大阪の芸能史というものに対して川が非常に重要な役割を持っていることをあらわしているわけですね。

古代の話にさかのぼりますけれども、もう亡くなりました井上靖という有名な小説家がおりました。毎日新聞大阪文化部の記者を長くつとめた、この方の小説には川が出てくるものが多くて、最後は孔子の伝記を書きました。孔子というのは、川を見て「行くものはかくのごとしか」と有名なせりふを論語の中に吐いているのですけれども、つまり川というものが歴史とか時間とか人生とか、時の歩みを象徴するものとしてとらえているわけです。この人の

小説に『額田女王』^{ぬかたのおおきみ}がありまして、これは有名な万葉の歌人ですけれども、この『額田女王』という小説は、難波宮の造営に始まります。最後が大津京、大津宮の滅亡、近江朝の滅亡です。そして、壬申の乱の後、額田女王は晩年を迎えるという構成になっておりまして、淀川の水域が7世紀の後半から、大和川の水域よりも日本の中心に近づいていくというプロセスがわかります。

古代、淀川と大和川の水域のどちらが日本の王朝の主流になるかというのは拮抗していました。例えば、継体天皇という天皇が日本海側から来て、非常に時間をかけて即位して大和へ入る。この天皇の頃から、淀川水脈というのは文献にたくさん出てまいりますね。ところがその後、飛鳥に都が戻りますので、聖徳太子の頃は和川のほうが中心になります。その後、いわゆる大化改新で藤原鎌足が出てくる頃から、また淀川のほうが王朝の中心になってきます。藤原鎌足の墓が高槻市と茨木市の境にあるそうですけれども、それはなぜかよくわかりません。藤原氏そのものは大和から出ているのですけれども、淀川の水脈が中心になってくる。これは、やはり水運というものを考えると、大和川の水量では限られておりますしね。

時代を下れば、平清盛と豊臣秀吉の2人が同じことを考えています。それは何かと言うと、琵琶湖と日本海側の間に運河を掘るということ。これは実現しませんでした。清盛が本気でやろうとして、何かいろいろとよくないことが起こったらしく、それで息子の重盛がやめさせますけれども、ここは距離が短いんですね。現在は、あの辺りまでいわゆる昔でいう国電が行くようになったので、電車で若狭まで行くとわかりますが、非常に近い。ちょっと切り立った山を越えたらすぐ敦賀のほうへ出てしまいます。だから、そこを掘ろうと考える人間が出たのは無理ないと思うんです。そうすると、日本列島が一番の大動脈、日本海側から瀬戸内海まで一気に物を運ぶことができますよね。実際に、近世以降、信長、秀吉以降、現実に日本のハイウエーというか、高速道路に近いものに、琵琶湖・淀川水系がなってきたことは確かだと思うんです。だから、長い歴史の要請で、やっぱり淀川水系へ中心がいくようになっていったんじゃないかなと思います。

ただ、そこへいくまでには大変な苦勞があったわ

けで、例えば、大阪の場合は水を非常に活用した町ですので、例えば、最初に架けられた橋の記録というのは、今の大阪の猪飼野の辺り、大阪市の東部に残っております。古代から大阪は洪水の被害が大変多かったのです、そのあたりに人柱を立てるとか、そういう怖い伝説が残っております。それから、「食い倒れ」という言葉も、「食い」だけじゃなくて、橋の「杭」ですね、材木の杭、これはすぐ倒れてしまうということで、その「杭倒れ」だという。一方で、京都の「着倒れ」も、着物の「着」だけじゃなくて、お寺が燃えるたびに材木を調達しなければいけないので、「木」だという説もあつたりとか、それはよくわかりませんが、大阪の食い倒れというのがそういう意味合いでも使われています。橋の建設費でいかに大阪人が苦勞してきたかがわかります。

もう一つ大阪のシンボルになっておりますのは、^{みおつくし}漣標というシンボルマークです。和歌における大阪の枕詞となっているわけで、これは通行する船に水深を知らせるための航路の標識ですね。現在、大阪市も市章として使っているわけですが、これが大阪の一つのシンボリックなイメージになります。淀川の河口に^{でんぼう}伝法というところがあります。ここに漣標住吉神社というのがありまして、遣唐使の航路安全祈願としての祭壇をつくっています。

伝法という地名は近々注目されると思います。来年3月に、長い間懸案でありました近鉄電車と阪神電車がようやくつながる。これは私、感無量なんです。もう幼稚園のときから聞かされていまして、一体いつできるのかなと思っていたら、もう50年かかっているんですよ。やっとながらることになったわけですが、そうしますと、阪神電車の西大阪線という尼崎と西九条の間を結んでいる線路を通るわけで、そこに伝法という駅があります。この伝法というのは、江戸時代は大きな町だったわけです。大きなお寺があり、その寺は、今もありますけれども、もっと寺域が広くて、芝居小屋が立つようなお寺があったわけですね。伝法というのは、「伝える法」と書くわけですが、これは仏法が伝わったところだという意味だそうなんです。古代に、仏法、仏教ですね、それが伝わったという海岸地域です。

大阪湾岸に最初いろいろなものが入ってまいります。現在、なぜ伝法という町が小さくなってしまっ

ているかということ、冒頭に申しました、明治時代に新淀川を付け替えて、付け替えとか、開削ですね。新淀川をつくったために、その伝法の町のかなりの河口部分が水没してしまったんです。だから、明治初期の淀川と今の淀川というのは全く違うということになるわけです。

明治時代に、そういう大規模な付け替えを、新淀川の開削を行ったということは、結局、明治になっても洪水がやまなかったからです。明治時代に3度も大きな洪水があります。洪水は、江戸時代末期にもありました。例えば、『南総里見八犬伝』を書きました滝沢馬琴がたまたま大阪へ来たときに大洪水がありまして、そのときの彼の描写を読むと、もうほとんど古代の河内湖が再現してしまっているとか、大和川まで水になってしまっている、淀川から大和川まで。そうすると、東大阪から八尾まで全部水で埋まってしまっているということになります。一度洪水が起るとそういうふうになります。堺まで大和川を流していてもまだそうだったわけですから、やっぱり大和川を南に切っただけではだめであるということで、結局、大阪市内に流れ込んでいる大川を、よりもっと大きな新淀川を今の十三のほうに開削したというのが20世紀になってからの歴史なのです。そこから100年ぐらいがやっとながらったというところで、大変苦難の歴史を歩んできた川だということになります。

今年は『源氏物語』が書き終えられて1000年ということで、あちこちで『源氏物語』に関するイベントが行われております。紫式部が「須磨の巻」と「明石の巻」を書いたのが石山寺ということになっております。この石山寺も、古代に都城をつくる時に田上山のふもとの石や木材を切り出してくる管轄の役所みたいだったところが、後に寺になっていったわけです。そこで紫式部が『源氏物語』を書いたといわれています。そこから「宇治十帖」の舞台となった宇治川を通りまして、下流が淀川ということになります。『源氏物語』は、もちろん京都が中心ですので、大阪はそれほど出てまいりませんが、その中で名所として出てくるのは「難波の堀江」です。光源氏が難波の堀江と住吉へ参ります。ですから、平安時代にその2つは大阪の名所であったとわかるわけですが、難波の堀江というのは、古代の仁徳天皇が、今の淀川の前身を、河内湖から直

接西へ、大阪湾に水を引く水路をつくったのが始まりですね。今の大阪市内の上町台地と生駒山の間に水がいつも溜まっているので、ここがいつも洪水になります。これをいかに西の海に流すかという、古代はそればかりですね。まず、仁徳天皇が難波の堀江の工事をやりまして、それから、これは洪水軽減のためでもあったでしょうけれども、桓武天皇のときの三国川の開削、そういうことを何度も繰り返して、現在、やっと洪水がなくなってきたという状況だと思うんです。

話は『源氏物語』に戻ります。「須磨の巻」・「明石の巻」が、大江といいました大阪から西へ行くという距離的にほどよい距離だったんですけれども、そういうふうを考えますと、『源氏物語』に書かれたそのコースというのは、大体、淀川沿いのコースで書かれていることがわかるわけです。この淀川を舞台に、『源氏物語』が書かれた平安中期よりちょっと前、天神祭の原型となります銚流しの神事が10世紀に始まっております。木製の銚を流して、着いた川岸に御旅所をつくって神様におこしいただくというわけですが、これが現在1000年以上続く天神祭です。これは何度もコースが変わって、特に戦後、橋げたが低くなり、その下を通れなくなり、船渡御のコースが変わってしまいました。私は淀屋橋と大江橋をちょっと高く上げたらどうかなと思ったんですが、今日の新聞を見たら、国の重要文化財に指定されるそうで、そうなるとあんまり橋を架け替えることもできなくなってしまったなということですが、何とかあれを潜るようにして下流に行けないものかなとも思ったりもするわけです。いずれにせよ、この祭りが今も大阪に残っているということは大変意義深いことだと思います。

今日は、未来もテーマにということですが、案外、淀川水系の下流というのは、今でも船で渡るところがいくつかありまして、あるいは川の下を潜るトンネルなんかもありまして、意外にまだ水都らしい風情も残っています。やはりこれを残して欲しいなと思います。

それから、さきほど言いました伝法、明治の新淀川開削で埋もれてしまった伝法辺りでは、かつて非常に大きな、もう一つの天神祭りと言われたぐらいのお祭りがありました。お坊さんたちによる船渡御ですね、正蓮寺川のところで行われて、今も行われ

ているんですけれども、そういう川の祭りもあるということがまだあまり報道されていないので、ほとんど天神祭の記事一色になってしまうわけですが、いろいろなものがあるということを押さえておきたいと思っています。

幸いこの40年ぐらいは水害と呼ばれるものは非常に少なくなりました。ただ残念ながら、かつては上町台地からすぐ海が見えて、眺めがよかったんでしょうけれども、今は見渡す限り町になってしまっています。そういう意味では、わずかに残った水路というのは、今できるだけ残していくべきだし、中之島の南側、土佐堀川に新築するビルなどは1階をガラス張りにして、往来からガラス越しに中之島が見えるように行政が指導していますので、随分風景もよくなってきたと思うんですね。ただ、今度、朝日新聞やフェスティバルホールのビルが高層ビルになってしまいますので、200メートル、300メートルのビルが林立することになります。そうなると、水がどういうふうに見えるのか計算されているのかなというふうに、私はちょっと不安には感じているんです。

川岸を遊べるようにしたいという、つまり親水空間を広げたいということで、少しずつ広げて埋め立てるといって、棧橋みたいに広げていっていますので、水域が非常に狭くなってきている。このことは道頓堀なんかちょっと心配しているところなんです。しかし、水質そのものは大変よくなってきていると思います。

この間、枚方にあります水道局の建物に行きまして、現在、大阪府民が飲んでいる水というのを改めて飲んでまいりましたけれども、非常においしいですね。これは長い間努力されてきた結果です。大阪の水がうまくないと思っていたら完全な誤解です。今非常にいい水が飲めるようになっております。淀川そのものの環境がかなりよくなってきていると思うんですが、ただ、大阪湾の埋め立てで、赤潮、青潮の問題というのが発生していて、これは大阪だけで対応できる問題でもないのではないかと思います。だから、先年、水フォーラムというのを滋賀・京都・大阪の3府県で開催しまして、宣言も出したわけです。他府県と共同してやっていかないといけない、運命共同体で見ないとだめなんじゃないかということです。最近、天神祭の氏子である天神

橋筋商店街の人たちが、琵琶湖からとれるアシで名刺をつくったりとか、そういうことをして意識を高めようとしているようです。

去年、私は『淀川ものがたり』という本を廣済堂出版から出しました。淀川を描いた文学などは勉強していたんですが、何しろ理科系の知識がなかったものですから、国交省や河川環境管理財団にお願いしていろいろとデータを提供してもらわなければならないと思ひまして、まず伏見から枚方まで生まれて初めて手こぎボートで下りました。

それで一つ感心したのは、川の岸辺から見ると町の変遷がよく見えますけれども、水面から見たらほとんど変わっていないですね。堤防のすぐ向こうの近景は見え、堤防と山が見えるだけなので、その風景は江戸時代から変わっていないんじゃないかなという気がいたしました。だから、落語に出てくる三十石から見るとか、そういう風景も巨視的な風景としてはそんなに変わっていないんじゃないかな。李氏朝鮮から親善使節が参りましたね。彼らが見た風景とそんなに変わっていないんじゃないかなと思ったりしました。

高槻辺りに行きますと、段倉というのがありまして、1階の下にかなり石を積み上げてあるわけですね。その上に家が建っているので、やっぱり何か事があれば洪水が起こるんだなというふうに感じます。昔の洪水の記憶というのは生々しいんじゃない

かなと思った次第です。

それから、古代や中世にありました神社やお寺でも、場所が川岸から移動している例がたくさんありますね。やっぱり水没して建てかえた歴史というのはいっぱいあるわけで、洪水に苦しんできた歴史だろうと認識いたしました。

もう一度この地図を見ていただいて、いかに地形が変遷してきたかということをしをのびながら、淀川の水との戦いの歴史は日本の都市建設の歴史でもあった、これはマイナス面もありまして、7世紀や8世紀に大規模な宮殿をつくり過ぎて、そのときに山の本を切り過ぎて土砂が埋まったために、後に淀川の水はけが大変悪くなりました。それでかどうか平安時代はあまりたくさんの工事をしていないんですけども、そういう繰り返し、反省と努力の歴史でもあるということになろうかと思ひます。後ほどまたフォーラムで言葉が足りなかったところを補っていきたいと思ひます。ご清聴ありがとうございます。(拍手)

河内 厚郎氏 (かわうち あつろう)

文化プロデューサー／夙川学院短期大学教授。演劇評論から執筆業に入る。1987年から『関西文学』編集長を二期務める。1991年に大阪市内に個人事務所を設立。著書に『わたしの風姿花伝』、『淀川ものがたり』、『大阪探偵団』(共著)などがある。

【基調講演】

「最上川と文化遺産」

菊地 和博 (東北芸術工科大学准教授)



菊地 和博氏

皆さん、こんにちは。

山形から参りました。意外と飛行機では近いもので、あっという間に、1時間ちょっとで、昨日大阪に着きまして、今日の午前中に時間がありましたので、大阪城に行ってまいりました。恥ずかしながら、大阪城を今まで拝見したことがなくて、一緒に来た仲間と登ってまいりました。明日また大阪の名所旧跡を楽しみたいと思っておりますが、きょうは皆様とお会いできるのを大変楽しみにして参りました。最上川のことをお話しさせていただきますが、今お話しされました淀川については全くわかりませんでしたので、今お話を伺い、そしてこの後のフォーラムですか、これでまた勉強させていただきたいというふうに思って参りました。

今日、基調講演の40分で私がお話をさせていただくのは、最上川でもいろいろ発展の時期がある中で、近世の舟運とそれによる文化の受容や創出というようなことについてです。私は主に民俗学が専門なもので、経済史というか歴史学などという立場よりも、文化史的な視点からこれまで調査研究してきたものですから、それについてまずお話をさせていただきたいと思っております。

お手元に準備させていただいた資料のナンバー1に「最上川と地勢」という、私のつくったつたない

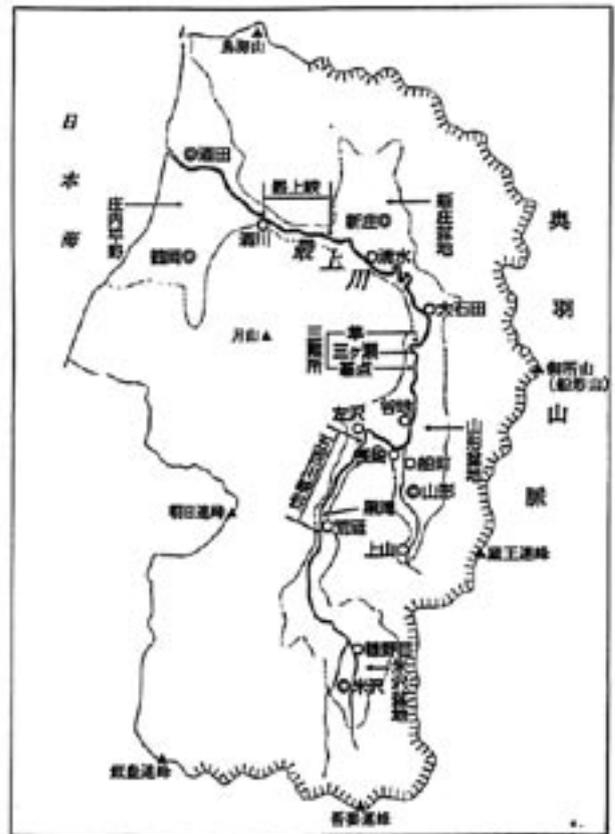


図1 最上川と地勢

地図といひましようか、模式図といひましようか、それがございます。最上川がどういうふうに山形を流れているのかということ、とりあえずご念頭に置いていただい、お話を伺いいただければありがたいと思ひます。

最上川は、山形県と福島県との境にそびえる吾妻連峰が源流であります。吾妻連峰の北には米沢がありますが、最上川は米沢を通過してずうっと北にあるいは西に延びています。途中、五百川とありますね。これは「イモガワ」と読みます。五百川、大変難しい読み方でございますが、五百川峡谷というその名のとおり大変浅瀬で、岩盤が露出しております。そして、左右に山が迫ったりしてしまひ、舟運、船が行き来するのにな大変難儀をした部分であり

ます。それを下ってほどなくして三難所というのが出てきますが、ここには隼・三ヶ瀬・碁点とあります。この3カ所がまた大変な船の通りにくい部分でありまして、これを「三難所」というふうに今でも呼んでおります。それから、大石田というところを通過しますが、この大石田というところは幕府の船役所が置かれたところでありまして。それから、下って行って清水と書いて、「シミズ」と読みます。この辺りは最上地方と呼んでおりますけれども、秋田県にだんだん近くなる場所です。ここを通過して、近くに新庄というような最上地方の代表的な都市があります。そして、また最上峡という部分があります。大体2キロぐらいなんですけれども、ここはもう本当に山間を川が縫うというような部分です。そしてようやく広々とした庄内平野に出て、ゆったりと流れるというような、おおよそそんな概況でございます。庄内平野には酒田があります。ここは港町として大いににぎわったところでありまして。そこで日本海に初めて流れ出ていくということで、最上川の全長は229キロメートルにもなります。全国で長さとしては第7位と言われております。それから、流域面積は山形県の面積の76%と、ほとんどがこの支流、本流と何らかにかかわる市町村であるということで、最上川の恩恵やら、あるいは先ほども水害のお話が出ましたが、もう一面の恐ろしい側面に直面しているということで、よかれ悪しかれ、最上川の影響を受けているということです。1県1河川ということができ、山形県内で生まれて、そして日本海に注いでいるちょっと珍しい川でありまして、したがって山形県民にとってはいろいろな意味でよりどころ、「母なる川」という川であります。

さらに、ここから、今日は大阪や京都、奈良と山

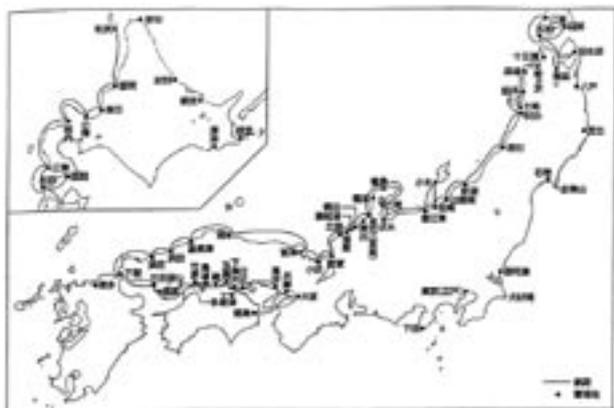


図2 東回り航路概念図（一部省略）

形が最上川を媒介にして、非常に深いかかわりを持っていたお話を、限られた時間の中でさせていただくわけです。そのことについては、まずもって、何といっても山形の最上川が日本海の海の交通とつながりを持っていたことを考えなければいけません。酒田で終わってれば、それはそれで県内だけを上り下りする舟運にすぎないわけですが、寛文11年(1671)・12年の2年間というのは日本の海運あるいは流通経済にとってとても画期をなす年だと思えます。私の資料の一番最初のところ、1行目の書き出しにそのことに触れております。1671年ですから、江戸時代の始まりですね、先に寛文11年に太平洋側の東回り航路が開発されて、次の年の12年に西回り航路が開発されております。この海の交通の開発の最大の目的というのは、まず第一に挙げられるのが、幕府の支配地からとれる米を安全に江戸に送ることだったと思えます。当時、いわゆる天領という直轄地が大体400万石ぐらい全国にあったと言われておりますが、各地にたくさん分散してございました。今話題の中心とする山形ですが、秋田県と2つつながっております、出羽国と呼ばれておりました。山形は出羽南部ということになります、この南部のほうに天領がありました。山形市というのは、山形県の真ん中辺りなんです。ここを村山地方というんですが、この村山地方というのは天領が随分たくさんあったところで、合わせておよそ12万石ぐらいは少なくともあったといわれております。変遷があって、正確にはなかなかよくわからないというふうに言われていますけれども、そのぐらいの幕府の直轄地があって、そこからとれる米、これが江戸の人々の食糧として非常に重要な資源であったということです。江戸は当時すでに100万人と言われるぐらいの人口を抱えていたわけです。

人びとの食べる最も大切な米をいかにして安定供給していくかということが幕府の課題でもあったわけで、そのことで太平洋側は東回り航路、日本海側は西回り航路が開発された最大の理由ですね。もちろん、それをきっかけにして、先ほども言いましたように、全国的な物流、経済交流を促進させるというねらいもあったと思いますが、そのようにしてまず天領の米を、最上川流域にある米を安全に事故のないよう運ぶ、その役目を負わされて、河村瑞賢をはじめたくさんの当時舟運、海運に従事した方がた

が苦労を重ねて実績を積み重ねてきたということになろうかと思えます。

ところで、先ほどお話ししたあの229キロの最上川全部に舟運が通ったわけではなくて、上流になると浅瀬が続き、米沢の北にある糠野目というところ—大変難しい字を書くんですが—で舟運はストップ。そこからは陸上で米沢に運ぶ、陸路で運ぶということになります。したがって、糠野目から下流の間のいわゆる最上川舟運と日本海海運が一体化することで、山形とこの上方が結ばれることになるということでもあります。

最初に、最上川の非常に特異な局面を北上川と比較して申し上げておきます。資料に簡単にまとめておきました。北上川は、ご存じのとおり、宮城県の石巻が日本海でいえば酒田みたいな役割を果たした重要な港町なんですけど、ここからずっと上流に行きますと、岩手県までつながります。岩手県と宮城県の2つの県を貫いているのが北上川であります。藩政期は南部藩と伊達藩、両方の藩の領域を通過した川でありますけど、北上川というのは双方の藩の統制が非常にきいておまして、簡単に言いますと、勝手に商人が自分の積みたい商品を積みなかつたわけです。江戸に向かう船の積荷は米が主なんです。先ほど言いましたように、江戸の100万の人びとのお腹を満たさなければいけないという一つの大きな役割を担っておりまして、米がまず運ばれたわけです。帰りの船に、これが先ほど言いましたように、勝手に商人たちが米を売った金で物を買って運ぶということができなくて、六仲間というふうにそこに書いておられますが、この六つの業者の規制が働いておりました。そこで北上川はなんといっても先ほど言いました蔵米輸送が主というわけですね。藩の領域で、支配領域から上がる米、蔵米、これを江戸の米蔵に納めるのが主だということになります。当時の地方政府である藩は、江戸あるいはこれからお話しする大坂の米蔵にまず納めて、そこでお金に換えて、参勤交代の費用や武器を買うお金、お城を修復するお金などのいろいろなものに使う。そういうふうにして、まず食べる分の米は残して、ほとんど船で運んで蔵米としたということなんですけど、帰りは空っぽで来るとしたら何を積むか。北上川の場合は、仙台藩の六仲間という6種類の商人たち、6種目と言ったらいいか、6商品を扱う商人のグループ

があるんですが、その方がたが、江戸からこれを船に積みなさいという指定をするんですよ。ですから、勝手にこれを積みたい、これを買ってきて持っていきたいということは許されなかつた時期が大変長く続きました。ただ、この制度が崩れるのが江戸時代の後期、1700年代の後半ですかね、天明あたりから崩れてくるんですが、ようやく少し自由になってきます。そういう規制あるいは統制がしかれたのが北上川の舟運であります。なかなか文書も残っていないくて、北上川舟運の、特に商人側あるいは民間側の記録がないので、実態がわからないんですね。

それに対して最上川はどうかというと、これとは反対のことを考えていただければいいんです。そこに民間人の自主運営、多様な商品荷物の運搬、特産品と大商人の活躍、流域社会の形成、そして上方文化との出会いと、こういうふうに行き着くわけなんです。ここで山形藩というものを少し説明しておきます。皆さんご存じだと思いますが、来年、NHKの大河ドラマで上杉藩の重臣でありました直江兼統という人物が主人公になるんですね。米沢に住んでいましたので、米沢も今それを盛んにPRしているんですが、その直江兼統と敵対したのが山形藩の殿様で、12代目の山形城主であった最上義光^{よしあき}です。彼は関ヶ原の戦いで徳川に味方して57万石の大大名にのし上がる人物です。仙台の伊達を監視する役目も負っていました。一方、徳川家康によって関ヶ原の戦いで味方につかなかつたということで佐竹義信という水戸の殿様が秋田に左遷されますが、それにもらむ役割を与えられるのが、山形藩主の最上義光なんですね。

この最上義光の孫の時代にお家騒動を起こしまして、最上家はお家取りつぶしになります。元和8年(1622)、江戸時代が始まって間もなくのことです。

そこで、山形城があつた村山地方から非常に大きな藩権力がなくなっていくんです。山形藩は、最上家を取りつぶされた後、鳥居という殿様が着任したときは、もう24万石ぐらいに減らされてしまいます。最上家が支配していたときは57万石で、秋田県の由利郡あたりまで支配したんですけど、それがもう一気に少なくなりまして、天領に一度なつたことも含めると、13回も山形藩主が変わるんですね。変わるたびに領域が少なくなっていくんです。そして、もうモザイクみたいに小さな藩が成立す

る。先ほど言いましたように天領と藩が入り組み－入り組み支配というわけですが－、非常に複雑な支配になっていたわけです。

ただ、政治的には、伊達藩とか南部藩のような、非常に安定した強大な権力がなかったために、最上川舟運においては、とても民間活力が発揮されました。つまり、民間の商人が特産品を運び、そして上方からあるいは北陸から大量の地元にはない文物を運ぶことができたんですね。最上川の舟運の活性化という意味では幸いなことだったのかなというふうに思います。

もちろん、米もたくさん運んでいます。御城米という天領から出る米が一番最初の春先に出発して、その次に商人荷物と、順序は固く決められておりました。御城米が1番目、蔵米が2番目、その後、商人荷物というふうにどんどん下され、酒田から北前船という廻船に積みかえられて、北陸を下って大坂に到着するというのが米を中心とする特産品の主なルートであったわけです。

資料に最上川の舟運で、行き交ったものとして播磨塩や大坂・堺・伊勢の木綿などと書いておきましたが、そういうのはご存じだと思いますので、見ていただきたいと思います。山形からの特産品はご存じの通り紅花ですね。そしてもうひとつ、これは余りご存じないかもしれませんが、^{あおそ}青苧があります。よく間違っ「アオイモ」などと読んでしまう方がいるんですが、よく見ると「苧」という字です。苧麻ともいいまして、あるいは「カラムシ」とも言います。「青苧・苧麻・カラムシ」という3種類の言い方をする植物が、紅花と並ぶ山形の特産品です。元禄時代（1688～1704）頃までは紅花よりも青苧のほうが出荷量が多かったんです。青苧というのは、植物の茎を繊維として織物の原料になります。後でもまた少し触れますが、全国の上布という夏の薄手の浴衣みたいな涼しい衣料の原料、これが苧麻あるいは青苧なのです。山形が東日本ではトップクラスの原料提供国でありました。これは、こちらで言えば奈良晒の原料にもなりまして、そういう意味でもとても畿内と関係が深いということになります。

以下、それらを売った代金でいろいろ買い集めた上方に関連する仏像や鋳物があります。特に山形には梵鐘がとても多いんです。京都産のもの、京都三条釜座でつくられた梵鐘などが多いです。それから

石造文化財ですが、ここでちょっと大坂との関係に触れたいと思います。まず、資料の②、山形市十日町、豪商佐藤利右衛門家の石灯籠とありますね。この佐藤家一族が大阪の住吉神社に巨大な石灯籠2基を奉納しております。文久2年（1862）です。これが資料に写真で出ておりますのでご確認ください。文久2年に紅花や繰綿・太物を扱っていた佐藤利兵衛家が一族を集めて組織した商売上の協同体である永寿講が住吉神社に奉納した高さ7メートルの石灯籠です。山形・京都・大坂などの商人46名がこの灯籠造立に参加しており、組織の強大さがうかがわれます。



写真1 大阪天満宮にある石灯籠。山形の豪商であった「佐藤利兵衛・佐藤利右衛門・佐藤而（柳）兵衛」の名が刻まれている。
（元治元年・1864年）

それから、資料④山形市蔵王山頂の狛犬です。台座に、「安政四年 大坂石工西川弥兵衛」というような文字が刻み込まれています。

それから、資料⑤鳥海・月山両所宮の狛犬の台座には、「大坂西横堀細工人和泉屋四郎兵衛」という文字が刻まれています。こんなことがはっきりしております。

あと資料⑥中山町岡という地区の柏倉九左衛門というのは大変有名な豪商ですね。やはり舟運とも関係のある家で、後に金融業なども営む名家なんです。そこの庭に小豆島の御影石でつくった石灯籠がある。これが、大坂城の三の丸にあった石灯籠と同じなんだという伝承なんですよ。午前中、大坂城に行ってきたと言いましたが、これを確認しに行ってきたわけじゃないんですけれども、三の丸というのは、地図で見ても、大変な広い領域がそれに相当しますよね。そこのどこに石灯籠があるのかなんていうことは、今になっては検証がもう難しいんじゃないかと思えます。一応、嘘か真かなんですけど、こういうふうには東北の山形にある名家の庭の石灯籠と同じものが、大坂城にあるというような伝承があるくらい結びついているわけです。それくらい江戸期の舟運というのは双方を結びつけたという、そんなふうに捉えていただければよろしいのかなと感じております。

それから陶磁器についてですが、東回り航路に面した地域の有名な陶磁器が流域のやはり舟運関係者とか、あるいはそれがまた転売されて、名主クラスの家にかくさんあるんです。その一部を書いてみました。畿内のものでなくて、九州とか四国とか中国地方のものもありまして、割と厚ぼったいのもあって、よくそれは船の重しにしたんだと伝えられていました。安定のためですね。先ほど言いましたように、御影石とか石灯籠が運ばれたのも安定のためでもあるというふうにも言われています。それから、蔵座敷が山形にも大分残されているんです。この蔵座敷の分厚いしっくい塗りの扉を閉める蔵金具、鍵ですね。これをよく見ますと、大坂の商人の名前が書いてあるんです。①山形市十日町の佐藤利右衛門家、先ほども出ましたように紅花でもうけた大商人です。この家は今現在も蔵座敷の大変すばらしいものがありますが、この蔵の金具の取っ手に「大坂」や、それから「鍛冶亀右衛門作」という職人名が彫られてあります。それから②天童市五日町の相沢兵助家、ここにも「大坂鍛冶亀右衛門作」とあり、同じ人物ですね。それから次③「伏見鍛冶八兵衛作」、それから「大坂備後町」というんでしょうか、これ何でしょうかね。「井池」の読み方は。[会場から「どぶいけ」の声あり]「どぶいけ」ですか。じゃあ、間違いなくここのご出身の方の八兵衛

さんという人がつくったものなんじゃないかな。ありがとうございます。今日はこれを何と読むのか教えていただきたくて参った次第でございます。はあ、間違いはないですね。これ何か彫り方が間違っただのかどうかというのがよくわからなかったもので、ありがとうございます。

このように、私の住んでいる山形と大阪とは直結しているということが実におわかりかと思えます。それが写真にもあります。資料のナンバー2に、「紅花灯籠」などというのも大阪の住吉神社に奉納されていることがわかります。その右脇に蔵金具に墨で塗って、拓本といたしましたか、蔵金具を黒で塗って紙を当てて、とったものであります。そんなことで、文字が浮かび上がってちゃんと書いてあるのがおわかりかと思えます。

このように、山形がこちらの文化の恩恵にあずかった部分が少なからずあるということです。

さて、私が今日ここで申し上げるもうひとつのポイントみたいなものがあります。これは地元の山形でのお話とか、東北でのお話の中でもくりかえし申し上げていることです。それは、今まで触れてきたように上方の、京都・奈良・大阪在住の非常に優れた職人さんのものを取り入れたり、あるいは物を運んできたりということであるとすれば、単純に言えば、高い文化が低い文化の方に、水が上から下に流れるように流れ込んだと言って良いかどうか。あるいは山形からすれば、高い文化をそのまま受け入れたと、そのように理解していいのかどうかということなんですね。これは、要するに、こういうふうには理解してしまえば、東北とか山形というのがいかに文化、文物面で立ちおけているかなどというふうには言ってしまうわけですよ。そのように捉えてしまうことになりかねないと思うんですよ。私自身も含めて、今まではどうもそう受けとめる嫌いがあった。私は平成4年に『特別展 やまがたと最上川 上方文化との交流』という図録を発行したことがあります。山形県立博物館で学芸員をしていた時期が7年間ありまして、そのときに開催した特別展の図録です。これは紅花ですね、美しいこういう色。これは山形が原料提供国なんですけれども、織りと染めの技術がなかったんで、ひたすら京都あるいは一部は大坂の紅染め問屋に卸して、こうやってできた美しい衣料を買い込んだ。そして今残っている。地

元ではこんな美しいものができなかつた。そのほかに仏像などもありますし、それからお茶が入ってきた甕、私の資料にも宇治茶を入れた甕を載せておられますけれども、それが残っているのでそんなものを図録に挙げたわけです。あと人形ですね、雛人形も入ってきているわけです。そこで、先ほどの問題点をくり返しますが、この文物の移動について、高度な文化から低いところに流れていったというふうな理解だけでいいのかどうかということを、私はこの時期あたりから悶々と考えていました。結論的に言いますと、現在は私は、やはり文化というのは、高い低いとか優劣とか、簡単に言うべきじゃないというふうに感じております。これは東北の人間だから引け目を感じてとかという意味じゃなくて、やはりどこの地域においても文化については高い低いとかという視点で見るときではないと考えます。上方から影響を受けて今に続いているものというのは、山形において、あるいは東北において、それが受け入れられる土壌というか、素地というか、そういうものがあるものが今に残っていて、やはり受け入れられないものはなくなっていったんだろうと、そういうふう考えるべきだと思っています。そこに、地域固有の選択の知恵が働いている。

例えば、今申し上げました雛人形。河北町谷地というところに4月の2日、3日に、1カ月遅れなんですけれども、雛祭りが行われております。京都でつくられた雛人形や江戸でもつくられた雛人形で巨大な62~63センチぐらいのものがあります。博物館にお借りして展示したことがありますので、非常に鮮明な記憶があるんですが、すばらしい衣装を着けて、すばらしいお顔をされた人形、そういうのがたくさんあるんですね。大分県の日田市に並んで雛祭りが盛んなところなんですが、日田市以上に河北町谷地は、舟運でにぎわった、河岸でにぎわったところなんですけれども、そういう場所に集中してあるんですね。しかし、それは、ただ雛人形が運ばれただけでは、運んできた人間がしまい込んだり、時にはお見せしたりと、それで終わるんですが、今、祭りとして非常ににぎわいを示している。あるいは、「土雛^{つちびな}」といって800度ぐらいで粘土を固めてつくられた土人形もある。その周辺にたくさん雛文化というのが生まれているんですね。それが今に続いている。これはやはりただ上方から受け入れたというと

らえ方でなくて、それが融合、定着、あるいは土着というか、そうしたもので、それだけ民衆がたくましく雛あるいは雛文化というものを地元なりに咀嚼し直してといいますが、受け入れ直して、今に雛文化として新たな形で定着させてきたんだろうと思います。

ですから、文化というものは、そのように庶民の知恵というか、あるいはそれをたくましく受け入れるエネルギーというか、そういうものの視点から見ていく必要があるだろうというふうに思っております。ただ単に受け入れた、あるいは出ていったではなくて、もう一度そういう文化史の視点というものを、私どもはきちっとこういう舟運、海運の文化の流れの中でとらえ直すべきではないのかなというふうに思っている次第です。

最後に青苧^{あおぞ}についてですが、実は先ほど紅花が大変有名な特産品と言いましたが、青苧も忘れてははいけないと思います。私はどちらかというとな青苧ファンなんです。紅花ファンもたくさん山形にいますけれども、青苧ファンの一人で、青苧フェスティバルをつくりまして、青苧文化復興、青苧ルネッサンスなどいいまして、今、栽培して織りも始めている人もいます。そういう人たちと一緒に取り組んだりしてございまして、ただ過去のものとしてだけでなく、舟運文化を今に生かそうと取り組んでおります。紅花と青苧については、最上川舟運で移出した側面と創出した側面の多面的なとらえ方をすべきだと思います。受け入れ、咀嚼し、そして地域文化としてあらたに定着させた。そういう人々の知恵と工夫というものもきちんと評価して、最上川舟運あるいは日本海海運をとらえるべきだろうというふうに考えているものであります。

言い足りなかつた分は、後のフォーラムで申し上げたいと思います。

以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

菊地 和博氏（きくち かずひろ）

東北芸術工科大学准教授。文学博士。山形県立高等学校教諭、山形県立博物館学芸員（民俗担当）、東北芸術工科大学東北文化研究センターを経て、2008年10月より現職。著書に『庶民信仰と伝承芸能』、『東北学への招待』（共著）、『手漉き和紙の里やまがた』などがある。専攻は民俗学・民俗芸能論。

【パネルディスカッション】

[パネリスト]

河内 厚郎氏（文化プロデューサー／夙川学院短期大学教授）

菊地 和博氏（東北芸術工科大学准教授）

高橋 隆博（関西大学教授／なにわ・大阪文化遺産学研究センター長）

[コーディネーター]

藪田 貫（関西大学教授／なにわ・大阪文化遺産学研究センター総括プロジェクトリーダー）

藪田：藪田でございます。高橋センター長に加わっていただきまして、パネルディスカッションを始めさせていただきますが、その前にご紹介をさせていただきます。

みなさんに2種類のお水をお配りしています。ひとつは山形市水道部の「やまがたの水」。もうひとつは大阪市水道局の「ほんまや」。今回のフォーラムの趣旨にご賛同いただき、ご提供いただきました。大阪の水というのはむちゃくちゃまずいというのが世間の通り相場でありまして、とくに西原理恵子さんというお母さん物をかいている有名な漫画家がおられまして、その人がラジオか何かで、「大阪の水はまずい、飲めるもんやない」というふうに言われたことがありました。それを聞いた大阪市水道局が腹を立てまして、「一度、西原さん大阪に来て、大阪の水飲んでほしい」申し出ました。皆さんも帰ってやってほしいんですけども、グラスにどこの水でも構いませんけれども、いろいろと入れていただいて、どれがどの水かわからないようにして飲んで、一番おいしい水を当てていただくといいですね。皆さん、おそらくこちらの「山形の水」のほうがうまいという先入観で飲まれると思うんですけども、ラベルを外して、このままで飲んだときに、どっちの水がうまいのか。このまま飲んだらだめですよ。コップに入れて、どこのものかわからないようにしてくださいね。大阪に来られた西原さんの前に5つの水が並びまして、飲んだんです。ところが彼女、一番おいしいと言ったのが大阪の水やったんです。彼女は、六甲山の水やと思ったらしいんです。そんなものなんですね、人間の味の感覚というのは。

水の話がこれからいろいろ出てくると思うんですけども、その一つとして、ぜひ帰ってお楽しみい



藪田 貫氏

ただきたいと思います。

さて今日は、非常に対照的な話をさせていただきました。川と文化遺産というものを共通枠としながらも、河内先生のほうからは、都市と川というテーマで古代の旧都から近世の大坂までを取り上げていただきました。そこに出てくる問題は、川がもつ洪水という荒々しい局面ですね。川を治めなければ都市が維持していけないという、ある意味、荒ぶる川としての淀川ですね。そういう意味で言うと、川は自然に流れているものじゃなくて、克服すべき、流れもつけかえ、津もつけかえ、景観も変えていくという、そういう側面を非常に強く出されたお話だったと思います。

一方の菊地先生のお話は、最上川が舟運として川が物を運ぶ、文化を運ぶという、ある意味で言うと、文明、文化を仲立ちする川としての非常に穏やかな、しかもそれが海を通じて、日本を縦に南北につないでいくという側面を強調されました。恐らくこの両方は、どちらの川にもあるんだろうと思えますけれども、今日の話の主題は、見事なぐらいコントラストがありました。

そういう意味ですので、どちらがどちらというよりも、それぞれのお話を前提にした上で、その双方の側面を重ね合わせて議論していきたいと思っております。実は、私どもの高橋センター長は山形のご出身で、大阪に住んでおられて、「なにわ・大阪文化遺産学研究」センターの長をしておられますので、まず、センター長から今日のお話をお聞きになって、話題を提供していただいて、双方の方がたの議論に進んでいきたいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

高橋：この問題、つまり最上川と淀川というのは、議論が全くかみ合わないのではないか、しかしかみ合いたいのと思っておりました。ですけど、両先生のお話をお聞きしますと、決してそういうものではないということを、今、藪田先生が申しましたようなことで、非常に密接なつながりがあるという気がいたしました。



高橋 隆博氏

それで、さっき効き水の話がでしたが、私は昭和38年（1963年）、山形を離れて関西に参りました。そのときに、真っ先に「もう何という水を飲ますねん、大阪は」と思いました。ここに、もしかすると柴島浄水場の関係の方もいらっしゃると思しますので、名誉のために言っておきます。最近は大変おいしくなっていますけれども、1963年当時、ちょうどオリンピックが翌年開かれますけれども、大阪の水は飲めたものじゃありませんでしたね、私は山形生まれで、しかも最上川のすぐ近くで大きくなりました。ちょうど現在の山形空港のところに進駐軍の空港がありまして、落下傘部隊がフワリフワリと落ちてくるようなところで、そこはちょうど最上川の河

床に近いところでありますので、絶えずこんこんと湧き出ているんです、清水が。非常に冷たく、ミネラルをたくさん含んでいるので、それを飲んで大きくなっておるものですから、大阪の水のまずさというのはもうたまったものじゃない。しかし、学生たち、夏に水道ひねって飲みますと「ああ、うま」とこう言うんですね。何がうまいのかというほど、水がまずい印象が今までありましたね。

それともう一つは、私の村は、6月から7月にかけてますと毎年大洪水。最上川には大きな堤防をずっとつくっているんです。かなり大きな堤防をつくりました。ですけど、それでもなおかつ、かつての最上川—「古最上」というんですが—の流れを変えて巨大な堤防をつくったわけですけども、水が逆流いたしまして、大きくなったばかりの稲を全部覆い尽くして、なおかつこれはもう大きな湖になるわけですね。毎年のごとでございまして、あと30センチほど水が上がりますと家が流されるだろうという雰囲気のところでも毎年暮らしてきました。大阪に来ましても、台風シーズンになりますと、これまた水が大変浸かりまして、それはそうですね、大阪は、言ってみますと濁の上に家がつくられてきたので、イタリアでいいますとベニスみたいなものでしょうかね。そういうところで都市が建設されておりますので、この最上川周辺、流域の人々も、あるいは淀川周辺の人々も、水のことについては随分頭を悩ませてきた歴史があることは間違いないだろうと思えます。

それで、今日のお二人の先生のお話をお聞きしまして、あえてこれからの議論を展開させていくために、二、三申し上げておきたい、提案しておきたいんですけども、川あるいは水というのは、文化形成、つまりまちづくりとか、あるいは地域づくりとか、あるいは村づくりとか、もう少し言いますと、産業育成にどのような役割を果たしてきたんだろうかということを、今改めて問い直す必要があるんだろうと思えます。

もう一つは、例えば、淀川の場合ですと、毛馬の閘門ができて、三十石船は当然のように衰退します。その後、京阪電車ができる、阪急電車ができるというので、今の太田が交通の幹線になり得ないという状況になってきます。そうすると一体どうなるかということ、近代の問題で、そういった交通網の変

遷によって一体、川の流域から何が失われたのか、川の流域だけじゃなくて、川の恩恵にあずかってきた大阪の人々にとって、文化の何が失われたのかということは、やはりつねに問われなきゃいけない問題が当然あるだろうと思います。

また、現代的な問題からいきますと、最上川もそうでありまして、あるいは淀川もそうでありましてけれども、今、何が問題になっているのか。文化財審議委員会が文化庁に大江橋と淀屋橋の重要文化財指定の答申をしたわけで、恐らくそのとおりになるんでしょう。だけど、それで我々は万歳でいいのかという問題があるんですね。国宝、重要文化財に指定されたから、それですむのか。京都、奈良の古社寺が世界遺産になったから万歳、これで果たしていいのかという問題があるわけです。むしろそこから出発しなきゃいけない。そうすると、川の流域のさまざまな生活も含めて、今どのような問題が起こっているのか。川の景観の問題、水辺の景観、このことをめぐって、一体どういう問題が起こっているのかということをも3つ目に考えました。

その次に、先ほど河内先生お話の中に、残された水路は極力残すべきであるというご指摘がありましたが、私もそう思います。昭和39年(1964)に四ツ橋が埋められたあのぐらいの状況になっているわけで、東横堀川はかろうじて残っている。しかし、川の上を阪神高速道路が走っています。この前、天神橋から道頓堀まで東横堀川をずっと歩いてきました。もう薄暗い。だけど、あの橋の欄干、殊に農人橋もそうでありましてけれども、石造の橋の欄干を地域の人々が一生懸命ごしごし磨いているんです。きれいなんです。川の水も比較的きれいになってきています。だから、地域住民の人々が、何とか川の流域を、橋を大事にしなきゃいけないという意識がようやく芽生えつつあると私は思っています。そういった一人一人の地域の人々のご努力によって、もしかすると水辺の景観が、水のある風景が保たれている。それはすなわち、水都の再生、水の都の再生につながっていく。

しかし、そこにはさまざまな問題があります。一つだけ申し上げますと、今、韓国大統領になっております李明博イ・ミョンバクさん、ソウル市長時代にどんなことをやったかということ、ソウル市内はすごい交通渋滞なんです。そこで、道路の真ん中だけをバス路線と

する。そういうことによって、通勤客はマイカーで通勤しなくなったんです。むしろバスのほうが早いです。そういうことで、交通の渋滞が一気に緩和されました。思い切った戦法なんですね。

もう一つは、確か460億ウォンぐらいかけたんですけれども、ソウルの町にある清溪川チョンゲチョンという川を、高速道路を取っ払って、掘り起こしてつくったんです。ここに年間30万、40万の人々が行き来するようになった。つまり、水辺の風景を行政がつくり出す。これは我々大阪も考えなきゃいけないと思います。

藪田：それではまず、川と文化形成、これはお二人のお話の中心でもありましたので、改めて振り返っていただくよりも、それぞれのお話をどのようにお聞きになったかということで、河内先生から菊地先生のお話を聞かれていますか。

河内：近代以前は、川というのが文化圏を形成したというのは間違いないと思います。例えば、阪神地域でも、電話番号の市外局番を見ますと、なぜ兵庫県の尼崎が大阪と同じ06なんだとか、0727も大阪府と兵庫県で共有しているわけですがけれども、06は淀川水域、0727は猪名川水域というふうに考えると非常にわかりやすいんです。やっぱり経済を中心とした生活に関しては川というのは決定的であって、明治にできた新しい行政区画では、100年経ってもまだ対応しきれない面があるというわけですよ。私なんか摂津国で生まれ育っているんで、これが兵庫と大阪に分かれているためにいまだにロスが多い。だから、近畿の行政区画再編に関しては、この摂津の問題を解決しないと、空港の問題からすべてが中途半端な議論になってしまいますよね。これはもう明らかだと思います。

それから最上川の場合、山形というのは非常にすっきりしていますけれども、淀川の場合は、先ほど言いましたように複雑怪奇な川なんです。摂津国のことと言いますと、中世までは、どっちかといいますが、私は政治史を中心に語ったわけですが、江戸時代以降はやっぱり天下の台所を支えた舟運ですね。そこで意外に猪名川の水域というのは重要です。今日のチラシが入っていた袋に、大阪の炭というのが入っていましたね。池田から猪名川あたりの

炭というのは高級な炭なんですよ。茶道で使われますね。あの猪名川水域は、まず池田の炭、それから伊丹で清酒が発明されて、それから、兵庫大阪との境あたりに園芸、植木とか、こういう産業があって、非常に付加価値の高い産業が近世以降に興ってきた。これが、私は、日本の資本主義の発達に影響を与えたのではないかと考えています。

1600年に日本で二大事件が起こっているんですね。一つは関が原の役、これはご承知のとおり。もう一つが清酒の発明といわれています。

ちょっと話がそれますが、我々学生時代は、マルクスを勉強したくない人間はマックス・ウェーバーをやりました。ウェーバーが、ヨーロッパの資本主義の発達について、勤勉・労働の倫理から説いたわけですよ。つまり、キリスト教の倫理に、働いて資本を蓄積して、それを再投資するということは、矛盾していない。それによって、プロテスタントが動機づけられ励まされたというような、大体そういう理論でした。

ところが、もう一人ゾンバルトという人がドイツにいて、これは消費の側から、ヨーロッパの家計簿を研究した人ですよ。この人が、ヨーロッパである時期に猛烈なプレゼントブームが起こって、名もなき羊飼いが一生貯めたお金で貴婦人にブローチを贈るとか、途方もない無駄遣いをした時期に資本主義が一挙に加速的に進んだとしました。

ですから、生産と消費、両方が飛躍的に伸びたということですよ。

ひるがえって日本を考えてみますと、私は、上方における物産、特にこのお酒の発明というものが、大きいと考える。生産基盤をほとんど持たない江戸という、もうひたすら消費する町の半分が武士で、彼らは働いておりませんし、男たちの単身赴任の町ですよ。そうすると、できるものはもう遊郭に決まっているわけで、かといって、江戸にはろくな食べ物もない。そこへ上方から高級な食べ物なり飲み物なりがやってくるということで、まず東海道が非常に発達いたしますし、それから、それでは足りないというので舟運も発達するというふうに、資本主義の発達というものには、生産基盤が広がると同時に消費というものが文化として興ってこないといけません。だから、1600年に江戸という町がスタート—厳密に言えば1600年ではないんですけど

も—江戸幕府のもとができるという、そのときに、必ずしも生活に必要でないお酒というものができたという、この2つがかみ合って、近世経済が一挙に加速したというふうに思っているんですね。

そういうことを考えていくと、この水運というのが日本の資本主義を発展させたのは間違いなく、その中でも次にエポックとなるのが、やはり北国との舟運の発達だと思います。

よく、大阪では元禄時代が栄えたと言いますが、例えば、井原西鶴の書いたものを読んでみると、食べ物にだし味とかそういうものは出てきませんね。魚の骨をくり抜いて、そこに玉子焼きを入れるとか、そういう物の組み合わせだけなんですよ。だから、カツオや昆布でだしをとるとかという文化はまだできていないんですね。素材だけで食べているんです。ところが、享保年間（1716-1735）ぐらいの作品になってくると、明らかにいわゆるスープとか、そういうものができている。これは明らかに舟運というものが日本海側とつながったことによって、きめの細かい食文化ができた。これによって上方の料亭文化もできた。そういうつながってくる文化があったということを考えると、古代は、大体、日本海側のほうが表日本だと言われていたんですが、近世においても、経済において、日本海側は決定的に重要なかぎを握っていたんじゃないかなと、そういうふうに、今日は痛感いたしました。

藪田：河内さんのほうから、山形の^{あおそ}青芋や紅花に対応するものとして上方の酒という提案を逆にさせていただきましたけれども、菊地さんは先ほどの河内さんのお話をどのようにお聞きになりましたか。



菊地：河内先生のお話で、淀川の変遷というのは、日本の都市建設あるいは国家というものと深くかかわっているんだというお話をいただいたわけですが、なるほどなど。淀川というのが、そういうふうな一つの国の統治と深く直結するような川という印象を非常に強く感じました。

河内：つまり、私が言いましたのは、淀川・琵琶湖・日本海側の酒田ぐらゐまでが一つの川なのだ、と。一つのラインなんだということです。そこにいろいろな支流がいろいろな物産を運んでいくので、この大動脈－酒田から淀川の下流ぐらゐまで－を、もう一つの川とみなしていいんじゃないかなというのが、私の仮説なんです。

菊地：ああ、そうですね。

先ほどの高橋センター長の問題提起とかかわるんですけれども、川がどう地域や町や村の形成にかかわるのか、まちづくりと関係するのかということについてですが、川がどういうふうに都市や国家とかかわるかについて考えると、最上川は、非常に大胆に言いますと、農村の村落形成にとっても関わってきたのだらうと思います。

一つこれを見ていただきましょう。

これが庄内の夕日に照らされた最上川と水田なんですよね。この景観がよく取り上げられるんですけれども、最上川は下流に至ってようやく、水田を潤す、直接の本流からいわゆるかんがい用水として引き込める、そういう川になるんですよね。ただ、上流、中流はすり鉢状になっているものですから、本流からはなかなか水が引きにくい。支流からは割と



菊地 和博氏

引けるんですけれども。下流になるとこのような見事な稲作水田の風景が出てくる。これは、高橋センター長さんが先ほど2番目に言われたいわゆる景観の問題です。最近、私どもは、最上川の世界遺産登録を目指して取り組んでいるんですが、この最上川の文化的景観ということにも視点を当てて、もう一度そういう視点から最上川の機能、存在というものを明らかにしていこうとしているわけなんです。そういうことからすれば、最上川は農業の基盤形成、かんがい用水という点で、非常に有効な水、川であったということと、それがまたもう一つ文化的景観をなす要因にもなっているという点があります。

それからもう一つ、地域づくりという点については、やはり水力発電なんですけど、これはやはり本流をとめるというのなかなか難しく、やはり支流にたくさんの水力発電所がつくられているんですが、大正年間に水力発電を試みた人がおりまして、本流から直接隧道を掘って、水を取り出して、その落差でタービンを回して、電力を周辺の村々に供給するというようなことをした人物がおります。そういう試みは必ずしも全面的に山形の暮らしにつながるものではないんですけれども、電気のある明るい暮らしの一つの端緒を切り開いたという意味では、記憶すべき取り組みなのかなというふうに思うわけです。

さらにもう一つは、文化的景観という部分については、山形はご存じのとおり、出羽三山の祈り、修験山伏が切り開いた山がありまして、山とそこから流れ出す水が集まって大河の最上川がその山間を縫っています。出羽三山、あるいは蔵王、そして鳥海山あたりを縫うようにして日本海に出ていく。その間に、先ほど申し上げた舟運に関係する人々たちが舟運の安全をひたすら祈った。その祈りを、例えば湯殿山に求めたり、それから、そこまで行かなくとも、その一つ手前の葉山^{はやま}という山がありまして、これも山伏が回峰修行したところでありまして、その葉山という山も農耕の山であると同時に船乗りたちが祈った、そういう記録が残っています。このように、祈りの山、祈りの神仏が最上川の周辺に住まうという関係にありました。これがずっと下流にもあります。先ほど最上峡という2キロぐらゐの山間を縫うと、酒田に出ると申し上げましたが、その2キロの間にも、例えば矢吹神社という神社がありま

す。本合海^{もとあいかい}という地域にあるんですが、ちょうど船で下ると見えるんです。山の中腹に小さな神社がありまして、そこには義経伝説があるんですね。義経一行が岩手県に落ち延びたときに、そこに祈ったという伝説もあって、『義経記』に登場します。「矢吹の明神」という名称で出てくるんですけれども、そこがまた舟運の守り神が住むところということで、そこを通る船人たち、船頭さんたちが手を合わせました。それから、もうちょっと下っていくと、仙人堂という、やっぱりお堂が、山の中腹、酒田に向かって右手の山のふもとにあるんですね。これも『義経記』に記されていて、常陸坊海尊という義経一行に途中まで従う人物が、そこで義経一行の落ち延びる先の安全を祈って、そこへ行って仙人になったという伝承があるんです。だから「仙人堂」と名前がついているんですね。そこもまた、船人たちの守り神ということで、そこでもまた手を合わせる。手を合わせている江戸時代の絵図も残されているわけです。

そんなふうにして、祈りの景観、文化的景観というのが、最上川の流れる道筋に配置されているといえますか、存在するということですか。これは淀川ではそういうものは余り見られないのかなと、先ほどお話を聞いて思いました。このあたりが相違点なのかなと思った次第です。とりあえずここまでにします。

藪田：いま、菊地さんの問いかけがありましたが、流域社会、景観の問題で、淀川の方の問題点とか特徴を指摘するとどうなりますでしょうか。河内さんは伏見から船で来られたときに、堤防越しに見る景観はほとんど変わっていないとおっしゃっていただきました。

河内：ええ、まあ枚方ぐらいまではね。ただ、今、スーパー堤防という大変大きな堤防をつくって、その上に新しい町もつくったりして、かなり治水に関しては大きな投資をして、ここのところは、本当に洪水の心配はかなり少なくなっているんですが、やっぱり沿岸部のほうが問題になってきますね。大阪湾をこれ以上埋め立てていったいいいのか、そういうことがちゃんと本当に計算されているのかどうかです。それがかなり川の中の生態系を変化させている

ようでした、これは大阪市だけで対応できる問題でもないんです。東京湾なんかもそうだと思いますけれども、思いもかけない変化がかなり起こってきているようですね。だから、その辺はちょっと、湾岸部で何かコントロールする機関が要るんじゃないかというふうに考えますね。

大阪市内に関しましては、少しよくなってきているかなと思います。昭和30年代にどどん川を埋め立てていった人の話を聞きますと、確かに今は残念だと思うんだけど、その当時はもう緑青が出て、臭くて住めなかったと。だから、実際に住んでいる者からしてみれば、やむを得なかった面もあるということなんです。ただ、いわゆる大阪の景観的魅力というのは堀割によってかなりつくられていたわけなので、それを埋め立てたことで、地形に「あや」がなくなったということは事実だと思うんですよ。そういう意味では、せめて残っている堀割なり大川の分流なりを全部残すべきだし、そこへ水上バスがもっと入っていけるようになれば、観光的価値もあると思いますが、さっき言いましたように橋げたの問題があって、必ずしも大型船は通れなくなっている。

このあたりをどうしていくかです。今度、朝日放送が大川沿いに本社を建て替えまして、そこへ船が停留できるようにしているわけです。そこで新事業を展開したいと言っているのは、そこから大阪ドームのほうへ、安治川のほうへおりていく川ということを想定しておられるようです。これは臨海部に近いほうの景観をもう一度考えていくということです。確かに、中之島近辺は船に乗ってもまずまずの景観なんですけれども、安治川の下流のほうへ行きますと、まだ殺風景な風景なので、その辺に魅力的な景観をつくっていくことですね。それから、昭和初期までにつくられた橋の下を通ると、下から見上げると非常にデザインが工夫されていて、あの当時ということは、案外近い過去まで、みんな船を使っていたんだなとよくわかるんですよ。そういう意味では、戦後は完全に陸のほうが中心になってしまった。

これからはどういうふうにして水都の景観を回復していくかということです。アクアライナーが、以前は通勤用に使われていましたけれども、それが今はなくなってしまった。観光用だけになってしまっ

ているんです。通勤用に使うには、大阪人のライフスタイルを変えていかないといけない。幸い、大阪市内に人が居住し始めた。人が戻ってきているんですよね。しかも高齢者がいる程度戻ってきている。こういう場合に、船を使った水運というものを日常生活の中で楽しめるかどうか、これは業者のほうでもいろいろ魅力的なプランを出していかなくちゃいけないんじゃないかと思えます。

最近驚いたことに、四ツ橋筋を水陸両用船が走っていました。時々見るんですよ。そのまま着水できるらしくて、そういうものがどこまで普及するかわかりませんが、大阪市の実験が始まっているところなんですよ。今は過渡期だと思います。

藪田：その話は最後に、フロアにおられる方も含めて、川の保全や再生について考えてみたいと思います。川と文化の形成の話ということ、それから流域の景観を含めた問題、もう一つは、今のお話にも出ましたように、川というものがどこに行っても大きく変わりました。鉄道が走り、自動車が走り、物流というものが路上に特化してしまうということで、川そのものが運搬手段ではなくなってしまっているという側面があります。この大きなモータリゼーション、あるいは近代化の過程で、川というものが我々に向き合う姿というのは、大きく変わってしまったかと思うんですが、その点では、大小ありましても、最上川も淀川も同じではないかと思えます。

そのあたりの戦後の数十年の間に変わってきたということ、そこからさらに今後、川の再生の手がかりになるようなことがあれば、少しお話しいただきたいと思えます。菊地さんからお願いします。

菊地：確かに、最上川も世界遺産を目指していると申しましても、大変汚くなっているのも事実なんですよ。数カ月前、地元の山形新聞にも、最上川に汚いごみが投げられている、川岸にごみが浮かんでいるというか、寄りついているというか、そういう場面が写し出されて、県民は大変がっかりしたんです。その証拠に、魚が非常に少なくなっている。これは、私の大学で今年の1月と2月に連続してシンポジウムを開いて、私は話題提供し、そしてコーディネーターも務めて、皆さんと最上川を考えると、ことをやったんですけれども、その中で、会場

の方が手を挙げてくれて、よく最上川で魚を釣り続けてきたと。ところが、本当に種類も数も減っているということで、これはやはり汚くなっているからじゃないかということをおっしゃって、とても胸が痛みました。最上川にそういう側面が現実的にあるということは、認めなきゃいけないと思うんですよ。

こういうことをどういうふうに運動として是正していくかということについては、今、山形県、あるいは市町村、あるいはマスコミがいろいろ取り組んでおりまして、そのうちのいくつかをご紹介します。一つは、官民が一緒になって「美しい山形フォーラム」という組織をつくっているということです。最初、山形県庁の中に事務局が置かれておりまして、美しい山形・最上川フォーラム、100年プランを決定したなんていう報道がなされたりもしたのですが、そこで最上川の美化運動を強めていこうということになりました。不法投棄の削減と防止とか、自然環境、生態系などの保全回復、流域文化資源の再評価と活用など、いろいろ目標にしています。

それから、最上川の講座を定期的に行っています。歴史も環境も含めて勉強を重ねる、そういうことを考えておりまして、今は山形大学に事務局が移されて、まだ続いております。これが官民運動の一つです。1口1,000円でだれでも会員になれるという、そういうもので、『美しい山形・最上川100年プラン』という冊子も発行して、周知徹底を図ろうとしております。

それから、山形県と国土交通省が発行している『最上川読本』という、小さな冊子がありまして、これを読めば、最上川のほとんどすべてがわかるみたいな一冊になっています。歴史や自然、生態系、それから先ほどは触れませんでしたけれども、松尾芭蕉が元禄年間（1688～1703）に訪れて、有名な「五月雨を集めて早し最上川」を歌っているわけですね。山形県で13の俳句を残しているわけですが、そういう文人墨客、あるいは斎藤茂吉という山形県出身の俳人、短歌を詠む大家がいますが、そういう人たちの姿が、これを見ると全部わかるんで、無料で配布しているんですよ。これを勉強して、さらに「最上川電子大事典」なんていうふうなものでも学べます。これはインターネットで最上川

を検索するといろいろなことがわかるというようなものを県と国土交通省が考えているものなんですね。

それから、あと、運動としては、最上川桜街道という名前で、これは地元の山形新聞といろいろな団体が協力して、市町村が窓口になって、堤防に桜をずっと植えていく、そういう運動を始めております。これは運動を始めてもう3年ぐらいになります。主に庄内のほうから、日本海側に近いほうから進んできておまして、これからもずっと続けようという美しい最上川づくりの一環のような取り組みをしたりしています。何といたってもこういう取り組みを子供たち、次世代につなげていかなきゃいけないということで、小学生がリレー方式で、最上川の流域200キロを歩きつなぐということをしています。何キロかある地元の小学生が歩いて、さらに次からまた近くの地元の小学生が歩き続けるということで、先ほど最上川229キロと申し上げましたが、ここではその中の200キロを歩きつなごうという運動で、これは先日、酒田まで到達しました。

こんなことで、子供たちにも最上川を身近な川として認識してもらおうということで、実体験として歩いていただくというような取り組みをしています。あと、「最上川検定」というのもありまして、先ほど言いました本とか「最上川電子大事典」という、ネットを見て勉強して、テストをやる。何カ月かに1回、国土交通省と山形県が共同でペーパー試験をやるんですね。それで点数をつけるんです。何点以上が合格なのかちょっとわかりませんが、それをやって、検定試験にパスしたら「最上川博士」になったと。こういうことで、県民に最上川を知ることは山形を知ることですよ、日本を知ることですよという、あるいは自然環境も考えていくことになりますよという、そういうことの運動をやりながら、最上川というものを再認識し、今に生きる川だということを、我々直接かかわる川なんだということの認識を深める、そういう運動をしているということなんです。

藪田：河内さんいかがですか。淀川、大阪としては。

河内：先ほど大阪市内の話ばかりいたしましたけれども、現在の淀川の話をしていきますと、実は水質は

よくなっているんですね。問題は、河口から入ってくる汚染のほう心配で、淀川そのものの水質は国交省も市民も大変努力して、この三、四十年で非常によくなっているんです。というのは、現に淀川のシジミは、味も悪くないので、百貨店で売られています。私も食べております。

もともと淀川水系というのは、日本に生息する淡水魚の3分の1の魚が生息しているのです。これはみんなが思っているよりはかなり豊かな生態系を持っているのではないのでしょうか。もっとも最近では外来魚が入ってきておますので、ちょっと問題が複雑ではありますが。



河内 厚郎氏

それから、毛馬のあたりから下流へは、干潟とヨシ原がずっと広がっています。特に阪急電車の十三大橋のあたりは干潟がたくさんできておまして、そこにボラやハゼが泳ぎ回って、サギやシギ、チドリも飛んできています。大変豊かなウォーターフロントになっておまして、これはまだみんなが都市環境として認識していないんですけれども、非常に魅力的なエリアになってきてはいるんです。ですから、これが今後どういうふう発展してくるかというのが、府民の努力にかかっていると思うんです。

芸術のほうでも、交響曲「淀川」なんていうのができたりして、これは昔、朝比奈隆さんが指揮しておまして、再演してほしいなと思います。それから、昔、道頓堀に芝居小屋が建ち並んで、いろいろな歌舞伎や文楽の名作が生まれたんですが、日本では、大体芝居小屋があるというのは水辺なんですよ。水商売という言葉があるけれども、京都の鴨川のところもそうだし、道頓堀もそうだし、宝塚の歌劇でもフェスティバルホールでも、東京はちょっと

埋め立てましたけれども、それでも国立劇場とか帝国劇場は、全部お堀端にありまして、やっぱり水辺に日本人は開放感とか非日常的な気分を味わうというのは確かですね。ヨーロッパの場合は、貴族のサロンとかができましたから、町の中に石づくりの劇場があります。日本の場合は、もともと川に面したところが要するに誰の土地でもないの、仮設の小屋を建てやすかったということがあるんですけれども、ウォーターフロントに劇場がたくさんある。現在でも朝日放送が川沿いに移転するように、意外と人間の行動というのは、そんなに体質が変わっていないんですよ。

そういうふうに注目すれば、やはりさっきの結論に戻りますけれども、大阪は旧市内の川に関しては、文化的な景観として残していく。一方では、新淀川のほうに関しては、新しい自然の公園として育てていく。この2種類を使い分けていく時に来ているんだと思います。

藪田：センター長、一言お願いします。

高橋：最上川のほうは、菊地先生がおっしゃるように、とにかく長い川で、川幅も広うございまして、堤防も巨大なんですね。ですから、どこから手をつけても可能ということで、やはり一級河川ですので、国土交通省が管轄しているわけでありましてけれども、もちろん淀川もそうですが、大阪は、国土交通省絡みで言いますと、北新地の本通になっていま^{しじみ}すかつての蜷川のところ、近松門左衛門の作品にも出てきますが、これをつい最近、復活しようというNPOの方々がおられました。新御堂筋のところから大江橋まで川をつくって、水を流そうと。それもちょろちょろじゃなくて、かなり水量の多い川をつくろうと考えました。量の多い水を、どうやって流すかは難しい問題があると思うんですけれども、それを盛んに考えた方がいらっしゃいました。これにつきましては、国土交通省はうんと言わなかったんです。結局、国土交通省の厚い壁に閉ざされてどうしようもない。この問題は、新淀川でも土佐堀、堂島でも、当然同じようなことが起こっています。

そこで、僕はアメニティーシティーというふうに考えているんです。今、新淀川が美しいのは、毛馬、桜ノ宮公園から造幣局を通過して、リーガロイヤ

ルホテルあたりまでで、そこを過ぎたあたりぐらいから、宮本輝さんの「泥の川」の舞台になった、あの辺で彼は生まれたいいんですけれども、端建蔵橋あたりから非常に殺風景な展開になっていくんですね。それまでの川沿いは、安藤忠雄さんが桜を植えたりいろいろな運動をやっているんですけれども、船で回ってみましても、巨大な防潮堤がもう覆いかぶさって、町の雰囲気が見えない。何とかこれをスーパー堤防というのはいけませんけれども一スーパー堤防というの、高さに対して8倍の幅をもつ堤防を言うわけですけれども一せめて盛り土をして、樹木を植えるぐらいの努力は、僕は当然やってもいいのではないかと思います。そんなことを申しますのは、御堂筋ができたのは、昭和2年(1927)なんですね。それまでは、淀屋橋筋という非常に小さな商店街でした。そこで梅田から難波まで何を街路樹に植えようかというのが問題になった。梅田から淀屋橋まではポプラなんです。そこから難波まではイチヨウなんですね。これには、当時、伊東俊雄さんという東京帝国大学を出た方が、御堂筋担当の調査係長として大阪市におられて、それで激しい論争をして、結局、イチヨウは国産の木だから、大阪は日本だから国産の木を植えることにして、現在、これは物の見事に成功しているわけです。昭和2年にこういうことを思い切ってやれと言ったわけです。ですから、何も川を全部復元しろなんて私は考えておりません。せめて今の水辺の景観をより充実した緑の快適な環境づくり、アメニティーづくりを目指すべきである。しかしこれはどうしても国土交通省の厚い壁があるんだろうと思います。

もう一つ、大阪には「天王寺七名水」といまして、特に上町台地の南あたりからきれいな清水が湧き出ているわけです。今、ほとんど涸れて何も無い。せめて残っているのは、清水寺の行者の滝と、四天王寺さんの病気を流すあの大きな亀井堂というのがありますね。どうやらあれは四天王寺の金堂下に青竜池があって、そこから水が出てくるんだというんですけれども、ああいった清水、湧き水に対する意識というのは、我々大阪人はほとんど忘れていくという感じがとてもするんです。これはいずれ大きな問題になるだろうという気はいたします。

藪田：では最後にフロアから、淀川や最上川を長

年、見続けておられる方、かかわっておられる方がたにご発言をいただきたいと思います。

今回のこのフォーラムでもご協力いただきました淀川資料館の小関さんお願いします。

私のほうから少し説明いたしますと、淀川資料館というのは枚方にあつて、淀川の中流域といひましようか、いわば要になっているところだす。今の淀川をどのようにご覧になっているか、お話しいただきたいと思ひます。



小関氏

小関：私、淀川資料館の小関と申します。

私自身は、淀川資料館に勤務いたしましてから、できるだけ現場の淀川のほうに出ております。主に魚の調査等に参加してござりまして、実際、ここ3年ぐらいで急激に淀川の環境がガラッと変わつてしまつているんですね。皆さん方の中にご存じの方もいらっしゃるかもしれないんですが、天然記念物のイタセンパラという魚が、ここ3年間、稚魚が一匹も見つかつていないという状態になっているんです。その原因がいろいろ考えられているんですけども、例えば外来魚の問題があつたり、そういう中で、私が見てござりまして、やはり生き物たちがすみにくい淀川というのは、人間にとつてもよくない環境なんじゃないかなと思ひます。

淀川の下流のほうでも、葦原があつて、干潟があつて、そういう場所というのは比較的いい自然環境が生き物たちに残されているんですね。今日お越しいただいている皆様方にもつと淀川を含め、川や水のことに関心を持って見つめていただけたらなと思ひています。

藪田：ありがとうございました。

それでは、もう一人。実は、淀川（大川）は大坂の人たちにとつて一番身近なのは、天神祭の船渡御がされる時だと思ひます。大坂天満宮文化研究所の近江晴子先生から少し、船渡御にもかかわつている大川のここ数年の変化みたいなものがあるれば、聞かせていただきたいと思ひんですが。

近江：大坂天満宮文化研究所にござり近江と申します。

大坂天満宮、天満の天神さんの夏大祭が、ご存じのように「天神祭」でござりまして、天神祭は1000年を越す歴史をもつてござります。古くは、大坂天満宮の場所は、淀川の本流が大坂湾に流れ込む、その注ぎ口のところにござりました。その当時は、天満宮のあたりまで、海が入り込んできていた、そういう景観でござりました。天満宮の社伝によりますと、毎年、「社頭の浜」から神銚を流し、流れ着いたところをその年の行宮（御旅所）と定めるといふ銚流神事（ほこながししんじ）が行われてござりました。社頭の浜という場合の浜は、大坂では、川岸、川端のことを浜と言ひますし、海岸も浜ですから、天神社の前が海岸やつたのか、淀川の川岸やつたのか、わかりません。とにかく海とも川ともつかない状態の時代から銚流神事が行われ、卜定された御旅所へ、御神霊に渡御していただき、その辺りの人々がお迎えしてお祭りし、また、お船でもとのお宮へお帰りいただくといふ、それが天神祭でござります。

その形がずっと受け継がれて、神銚を流して、毎年毎年御旅所を定めていたのを、江戸時代の初めにその場所を固定いたしました。今はもう埋められてしまひました京町堀川の、流末のところ（現西区京町堀三〈推定〉）です。天神さんの御旅所ができたあとに、ほん近くに雑喉場魚市場が成立しましたので、のち「雑喉場の御旅所」と呼ばれるようになりました。それから40～50年のち、寛文8年（1668）ごろに、御旅所は木津川右岸の戎島（現西区川口1）へ転宮します。それ以来、江戸時代を通じてずっと戎島御旅所への船渡御となりました。

江戸時代は、大川—まさしく淀川本流です—に架かりました難波橋（なにわばし）の北詰西から、御神霊がお乗りになつた御神輿が乗船され、大川は中

之島の剣先で堂島川と土佐堀川に分かれますが、北側の堂島川をずっと下って、中之島の一番西の端をぐるっと回りまして木津川へ入ります。ここで、堂島川と土佐堀川は合流して安治川となり大阪湾へ注ぎます。木津川右岸の戎島御旅所の真ア前に着船して、御神輿が上陸され、御旅所でお祭りをいたします。御神輿船が大川の難波橋を出航されるのが午後4時ごろ、もどって来はるのが午後8時ごろから10時ごろです。大川の天神橋から難波橋のあたりには、見物の船がいっぱい出まして、御神輿船をお見送りして、再びもどって来られるまで、花火をあげたり、どんちゃん騒ぎをして船遊びを楽しみます。また船に乗れない人々は難波橋の上やら大川の浜で見物をしながら、天神さんのお帰りを待つわけです。御神輿さんがもどって来られ、天満宮に還御されて天神祭は終わります。

明治に入りますと、御旅所が戎島から、新しくできました松島新地の真ん中へ転宮いたします。ですから、天神祭船渡御は、戦前まで、堂島川を下って、木津川へ入り、もとの戎島御旅所のちょうど川向かいの木津川左岸へ上陸し、そこからは陸渡御で松島の御旅所へ参ります。御神霊は、ちゃんと夜中のうちに天満宮へ還御されるんですけど、太鼓やら御神輿やらを昇っていた人達が松島で沈没されて、**「天神さんの朝帰り」**という言葉も残っております。お祭りの日の翌朝早くに、殿（しんがり）の玉神輿さんが宮入をされて、天神祭は終わります。

その天神祭の渡御が、戦時体制に入り昭和13年（1938）からとうとうできなくなりました。それから、戦争中から戦後にかけての10年間、天神祭船渡御は中止されました。

船渡御は、戦後の昭和24年（1949）に復活いたしましたんですが、とても松島の御旅所までは行けませんので、福島（福島の中央市場に仮の御旅所を設けまして、そこまで船渡御をされました。ところが、帰りに上げ潮になり、御神輿のお屋根が、10年の間に地盤沈下が進んで下がっていた橋桁にぶつかったり、大変なことがいろいろ起こりまして、再び船渡御は中止となりました。

そこで、いよいよ昭和28年、ときの大阪天満宮の宮司さんの判断で、下流に下る船渡御を180度転換し、上流へ溯る船渡御へ変更されたのです。神針を



近江氏

流して御旅所の場所を定め、その御旅所へ船渡御をするのには、穢れを川へ流して祓うという大切な意味がふくまれているのです。それを川を溯る船渡御にしましたら、大切な意味が薄れてしまいます。もし、下流の御旅所へ行けないということになれば、もう船渡御はやめてしまおうということになるのが一般的やと思いますが、そこが大阪の天神さんです。あのときの宮司さんの決断が無ければ、今に至る華やかな賑やかな日本三大祭の一に数えられる天神祭は、恐らくずっとずっと寂しいものになっていたことでしょう。

昭和28年には、大川の桜宮の辺に舞台船を設けて臨時の御旅所とし、船渡御をいたしました。現在は飛翔橋のところまで一もうちょっと行けば毛馬の閘門です一溯っております。大阪天満宮では、いつの日か再び、淀川下流の御旅所へ行く船渡御にしたいと願っております。

このように、大阪天満宮の天神祭は、社頭の淀川と切っても切れない縁でむすばれて、発展して参りました。今はやむなく、形を少し変えて船渡御しておりますが、その精神は変わらず、淀川あっての大阪の夏祭として未来に受け継がれていくことと思います。

藪田：ありがとうございました。

では最後に、お三方に川の将来、淀川と最上川の将来について、もうかなりいくつかの提案が出ておりますけれども、締めていただきたいと思います。河内さんお願いします。

河内：さっき蜷川の話が出ました。近松門左衛門の

作品に出てくるところですが、先年、電線を地下に埋めまして一応きれいになったんです。そのときモニュメントにいろいろ碑文を書き込む際、監修をやったんですが、本当は蜷川ぐらい、もう一度川にできないかなと、本当にそう思いますね。これは李明博大統領じゃないが、やっぱりトップの決断。これ、本気でやる気があれば、できないことはないと思うんですよね。

それともう一つ、大阪駅の北側にある北ヤードを森にしようということ。ここに何とか新淀川の水を引き込めないかという提案も出ていまして、これは、今、本当にできるものかどうか構想中でございますので、乞うご期待ということで待っていただきたいと思います。

藪田：ありがとうございます。では、菊地さんお願いします。

菊地：私は、最上川ということだけでなく、今、地球環境問題が非常に世界的に危機的な意識を持って語られている中で、自然環境を総合的視点で考えることが重要だと考えております。改めて思うのは、川だけでなく、川を生み出す山や森と、それから川が注ぎ込む海と、こういう自然体系を一体のものとしてとらえないと、なかなか川だけ、あるいは森林伐採の山林の山の問題、それから海の漁業の問題、これらが解決されない。縦割りの考え方、あるいは縦割りの行政とよく言いますが、それぞれ別個の取り組みをしていたのでは、なかなか解決できない。

このことを私が考えるヒントをいつもいただいているのは、宮城県の気仙沼というところでカキ貝の養殖をされている畠山重篤さんという方がおります。カキの養殖の仕事に高校を卒業されて以来従事されています。高度経済成長の時期に気仙沼で赤潮が発生して、おいしいカキがとれなくなりました。なぜだろうかといろいろ考えて行動した人なんです。結局、森がだめだからだと、あるいは山がだめになったからだと考えた。そこから流れてくる川が海に注いで、海に養分が入らなくなっているからだと。もちろん、物を途中で川や海に流す、洗剤を流すとか投棄、投げるものもふえたからだとということでもありますけれども、その根本である山や森に

いわゆる広葉樹がちゃんと生えてきて、その葉っぱが腐葉土として、養分として川を通じて海に流れ込む。そして、プランクトンがたくさん生まれて、それをカキが食べて、おいしい立派なカキが生まれるというその循環、自然の循環というものには彼は気づきました。そしてここ20年ぐらい、小学生と地元の人たち、養殖を営んでいる、漁業を営んでいる人たちと一緒に、気仙沼に注ぐ川の上流の植林活動をしているんですね。その活動、運動のお互いの合言葉としてとてもすてきな言葉があります。皆さんもご存じかもしれませんが、「森は海の恋人」というタイトル、テーマなんですよ。これはすてきなキャッチフレーズといいますか、テーマだなというも思うんですね。そのように、何度も言いますが、川だけでない、海だけでない、森だけでもない、やっぱり一体のものとして、そこに従事する人たちが価値観を共有して、別個の取り組みでなしに、できるだけ一致した価値観のもとで文明論的な視点を持って、この自然環境問題に取り組んでいくという、これが今から必要なのではないかというふうに私は考えております。

藪田：最後にセンター長、お願いします。

高橋：個人のレベルで川を汚さないのは、つまり魚の煮汁とか小芋の煮っ転がしの煮汁を捨てないことです。これはもう要らないものでふき取ることです。うろこが大量に流れる、これがあるんです。うろこ窒素が堆積して汚泥となって、これが水を汚す最大の原因です。もちろん合成洗剤もそうです。これは、個人のレベルですけれども。

もう一つは、やはり地域の住民、水の景観というのは誰のためのものじゃないんです。その地域に住む人々のためのものなんです。ですから、地域の人々がその水辺の空間をどう育てていくかという意識を育てることが大事なんです。これが一つです。

それと、やはりこれは行政のバックアップが伴わなければどうしようもないわけでありますけれども、ここは働きかけをしなくてははいけない。

3つ目は、この大阪の水の歴史とかまちづくりの歴史を知ること。河内先生がおっしゃったように、まさに治水は都市の建設の歴史である。この歴史を一体どういう教育の現場のレベルで教えてい

くのか。ぜひひとつ、世界の歴史も結構だけれども、大阪の水の歴史、都市の歴史、まちづくりの歴史、水辺の景観の歴史をしっかりと僕は教科として教えるべきだろうと思っています。

藪田：お後がよろしいようですので、これで終わりたいと思います。

3人の先生方、ありがとうございました。(拍手)

高橋 隆博 (たかはし たかひろ)

関西大学教授／なにわ・大阪文化遺産学研究センター長。2005年に、関西大学博物館内になにわ・大阪文化遺産学研究センターを立ち上げ、「文化遺産学」を提唱する。著書に『韓国美術と史跡の旅』、『博物館学ハンドブック』（共著）などがある。

藪田 貫 (やぶた ゆたか)

関西大学教授／なにわ・大阪文化遺産学研究センター総括プロジェクトリーダー。女性史を中心として国内はもとより、海外においても研究活動を広げている。著書に『日本近世史の可能性』、『近世大坂地域の史的研究』などがある。